
海賊戦隊ゴーカイジャー ～伝説を継ぐ者達～

ユートピア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海賊戦隊ゴーカイジャー 〜伝説を継ぐ者達〜

【Nコード】

N0676Z

【作者名】

ユートピア

【あらすじ】

世界を守った34のスーパー戦隊の力を受け継ぐ35のスーパー戦隊、海賊戦隊ゴーカイジャーの力を得た少年は何を求める！！
『派手に行くぜー！！』

なお原作が跡形もなく崩壊している作品があるのでご了承下さい。

第0話 プロローグ（前書き）

新しく始めちゃった……

読んでくれたら嬉しいです。

第0話 プロローグ

真っ白な空間に一人の少年が居た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・どこだ、ここ？」

漸く絞り出した言葉がそれだった。

「よし、まずはこれまでの事を思い出すか」

少年は自分の行動を思い出していった。一つう！ 朝起き学校へ行く！

二つう！ 学校が終わりバイトへ行く！

三つう！ バイトから帰る途中信号無視のトラックに跳ね飛ばされ
そんな子供を見つけ助けたが自分が跳ねられた！

「・・・・・・・・・・・・・・・・って死んだし俺！？」

少年は驚きながら自分の体を見た。

「肉片になつてゐる筈なのに、ちゃんとある」
「それはここが死後の世界だからだ」

少年は声がした方を見ると一人の男性が立っていた。

「何だ、おめえ？」

少年は警戒しながら男性を見た。突然背後に現れたから警戒するのは当たり前だが、

「まあ、それより頼みがある」
「・・・・・・・・・・・・・・・・頼み？」

少年が聞き返すと男性は頷いた。

「実は君にある世界を救って欲しい」
「……………はっ？」

少年はいきなりスケールのデカさに戸惑った。それもそうだが、いきなり世界を救えと言われたら誰でも戸惑う。

「待てよ、何でいきなりそんな話に何だよ？　それに唯の人に救えるか？　世界が」

「だから、その力を与えるから救ってくれ」

そう言って男性が取り出したのは携帯のような物と赤い人形だった。

「何だよそれ」

「携帯のは、“モバイルーツ”この人形のような物は“レンジャーキー”だ」

「その前に俺は救うなんて言ってねえ」

少年はそっぽを向くが男性はモバイルーツとレンジャーキーを少年

に差し出した。

「だったら最初に断る筈だ。なのにお前は力がないと言った」

「だから何だ？」

「救う気にいるんじゃないのか？」

「な訳あるか」

少年は頭をかきながら男性の持っているモバイレーツとレンジャーキーを見た。

「それに俺がそれでその世界を征服するって考えないのか？」

少年の問いに男性は口元に笑みを浮かべて、

「ないな」

それを否定した。

「根拠は？」

「子供を助けた。それだけさ」

「たまたまかも知れないぜ？」

「わざわざ自分が死ぬかも知れないのにたまたまで済ませる奴いるか？」

「たまたま目に映ったからな」

男性は笑みを浮かべたまま少年の肩を叩いた。

「そんな、助けようとする気持ちがあるから君に救って欲しい」

少年は男性とモバイレーツ、レンジャーキーを交互に見ると鼻で笑った。

「良いぜ。やってやるよ」

「そう来なきやな」

少年は男性からモバイレーツとレンジャーキーを受け取った。

「で、どうやっていくんだ？」
「慌てるな」

男性はどこからともなく宝箱を取り出し中身を見せた。

「これは……………」

少年の目に映ったのは数多くのレンジャーキーだった。

「ある世界で地球の平和を守った34の“スーパー戦隊”の力だ」
「スーパー戦隊の、力」
「そうだ。その力と伝説を受け継ぐ35番目のスーパー戦隊、海賊戦隊ゴーカイジャーだ」
「俺が、受け継ぐのか？」

少年は宝箱を見ながら男性に聞いた。

「ああ、君が守る為に必要な力」

「つまり、持ってけってか？」

「ああ、そうだ」

少年は男性から宝箱を受け取り中を見た後宝箱を閉じた。

「さて、次こそ」

「だから慌てるな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・まだあんのか？」

男性が手をかざすと赤い光と共に赤い海賊船が出てきた。

「これは・・・・・・・・」

「この船はゴーカイガレオン。君の住む場所も兼ねてる」

「住む場所か、確かに必要だな」

少年はゴーカイガレオンを眺めていると中に入っていた。男性もそれに続き中に入っていく。

「へえ、結構綺麗なんだな」

少年は船内を見ながら真ん中にある椅子に座り隣にあるテーブルに宝箱を置いた。

「これ使って守れて意味か」

「そう言う事になるな」

少年が隣を見ると男性が柱に寄りかかりながら立っていた。

「後は、仲間を自分の手で探せ」

「当たり前だ。与えられても嬉しくない」

少年は男性の方を見た。

「何だ？」

「聞き忘れたけど、あんたの名前は？」

「人は、私の事を神と呼ぶ」

「神か、取り合えずありがとうな」

少年は礼を言い男性は少年に言った。

「前の名前使えないから、新しいの考えてね」
「いきなりだな」

少年は啞然としながら暫く考え込んだ。

「赤旗………赤旗海だ」
「赤旗、海？」

少年はゴーカイガレオンと旗を見た。

「ゴーカイガレオンの赤と、旗。そしてゴーカイジャーの海」

「成る程な。それで」

少年、海は神を見ると手を差し出した。

「ん？ 何だ」

「握手、だ」

神は鼻で笑いながら海と握手をした。

「で・・・・・・・・・・・・・・・・どう使うんだ？ これ等」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そこからか」

海はモバイレーツとレンジャーキー、ゴーカイガレオンを見て言う
と神は溜め息を吐いた。

「頭に直接教えるから、後は自分のやりたいようにやれ」

「ああ、後頼みは聞いといてやるよ」

神が消えると海はモバイルーツを開きレンジャーキーを人形の形から鍵のような形にした。

「行くぜ・・・・・・・・」

海はモバイルーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジー!!」

海はモバイルーツにレンジャーキーを差し込み回すとモバイルーツの上の部分が剣を合わせたような形になり、そして……………

【ゴーカイジャー!!】

その後、海はモバイルーツを前に出し海の体が段々変わっていき赤

い海賊のようなスーツを纏った。

「ゴークイレッド!!」

海は35番目のスーパー戦隊、海賊戦隊ゴークイジャーのゴークイレッドへ姿を変えた。

「派手に行くぜ!!」

ゴークイレッドはゴークイガレオンに乗り込み舵がある部屋に行く
と舵を握り真ん中部分にゴークイレッドのレンジャーキーを差し込
むとゴークイガレオンが動き出しゴークイガレオンの前に光に向か
うとゴークイガレオンは白い空間から消えた。

第0話 プロローグ（後書き）

これから、応援お願いします。

第1話 海賊降り立つ（前書き）

ユズリハって、変換できないし。

良かったら見て下さい。

第1話 海賊降り立つ

宇宙空間に一つの光が現れるとそこから赤い海賊船、ゴーカイガレオンが出てきた。

「宇宙か、滅多に見れないから良いか」

そのゴーカイガレオンを操縦しているゴーカイレッド、赤旗海はそう言いながら目の前にある青い星、地球へ向かった。

「あれは・・・・・・・・」

それを顔が黒い十字の中心にある怪人が見ていた。

「忌まわしい海賊かつ」

黒い十字の怪人、“黒十字王”は憎しみの目でゴーカイガレオンを

見た。黒十字王はある世界でゴークカイジャーと34番目のスーパー戦隊、天装戦隊ゴセイジャーと戦いスーパー戦隊の力とスーパー戦隊を信じる人々によって敗れていた。

「今こそ復讐の時！　ハアアアア・・・ッ！！」

黒十字王の周りに黒いオーラが発生しそのオーラは一つずつ形を現していく。

ゴークカイゲオンは地球に到達すると街へ進んでいた。

「さて、何があるんだろうな」

変身を解いた黒髪に赤いコートを羽織った少年、赤旗海は宝箱を開け中のレンジャーキーを探り一つを手にとった。

「これからが楽しみだ」

その手には初代スーパー戦隊の秘密戦隊ゴレンジャーのアカレンジャーのレンジャーキーが握られていた。

街の住人は突如として現れたゴーカイガレオンを見ていた。

「うわぁ、騒ぎになってるし、って当たり前か」

窓から見ていた海は下の人混みを見て啞然としていた。

「どこか人気のない所に行くか・・・」

そのままゴーカイガレオンは人気のない場所まで進んでいった。

「あそこが良いな」

海は橋の先にある廃墟を見つけるとゴーカイガレオンの錨を下ろし海は廃墟の前にゴーカイガレオンから出たロープを伝い降りた。

「じゃ、邪魔するぜ」

海は廃墟に入ると廃墟の中は苔や草が生えていた。

「って、あれは」

海は壁際にあるパソコンと段ボールが置いてあり海はそれに近付くが入り口付近から足音が聞こえ振り返り様銃のような物ゴーカイガンを取り出し向けた。

「うわぁ!?!」

「・・・・・・・・何だ? おめえ」

海の目に飛び込んだのは茶色い髪少年が尻餅をついている光景だった。

「あつ、いや、その・・・・・・・・」

「だぁー!! うじうじするな! 腹立つな!!」

「ええー!?!」

海は少年に近付くと着ている制服の胸倉を掴み少年はそれに驚いた。

「集、どうしたの？」

ピンク色の髪に白いロボットを抱えて少女が入ってきた。

「いのり!？」

少年、桜満集は少女、ユズリハいのりを見て驚いたが海はいのり、集の順番で見ると胸倉を離し少し離れた。

「と言うより、何でおめえ等はこんな所に？」

「それより、上にある船、君の？」

「そうだが、っておめえ等が何でいるかだよ」

海はゴーカイガンを生舞い再び集といのりを見た。

「僕等は部活で……………」

「部活？」

「そう、現代映像研究同好会って言う部活で」

海は頷きながら壁際に置いてあるパソコンを見た。

「面白そうだな」

「で、あなたは？」

「人に名前を聞く時は自分からだろ」

いのりが言うと海は笑みを浮かべながら言った。

「僕は桜満集^{おひまじゅう}、でこっちがユズリハいのり。抱えてるのがふゅーねる」

集が自分といのり、いのりが抱えている白いロボット、ふゅーねるを言うと海は頷いた。

「今度は俺だな。俺は赤旗海、んでもって……」

海から次の言葉が出なかった。何故なら遠くから爆発音が聞こえたからだ。

「何今の!？」

「爆発音？」

集が驚きのりが冷静に言つと海は廃墟を出て走り出した。

「ちょっと待って!!！」

「集・・・・・・・・!!！」

集は出た海を追いいのりはそんな集を追った。

街では灰色の体のゴーミンと青い体のズゴーミンが人を襲ったりビルを破壊していた。

「「「ゴー!」」「「ズゴー!」」

先頭をズゴーミン三体、その後ろにはゴーミンが何体も居た。

「撃てえー!!」

その先で警官隊が拳銃をゴーミンやズゴーミンに撃つがズゴーミン達は何事もないように歩いていく。

「何だよコイツ等!？」

「知らないわよー!!」

そんな警官隊の中に学制服を着た二人の男女が銃を発砲していた。

「これじゃ切りが無い!!」

「キンジ、後どれ位弾ある!？」

「持つか分からない。アリアは!？」

「こつちも似たようなもん」

拳銃を撃つ少年、遠山キンジと銃を二丁持って撃つ少女、神崎・H・アリアはゴーミンやズゴーミンに撃つが弾は減る一方だがズゴーミン達はそれでも歩いてくる。

「ズゴー!」

ズゴーミンの一体が両腕に付いているクローからレーザーを放ちパトカーに当てるとパトカーは爆発して数人の警官が巻き込まれた。

「「「うわあああああああああああああ!!!!!!!!!」」」
「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!????」」

ズゴーミンの一体が撃つたのをきっかけに更にズゴーミン二体とゴ

ーミンが棒のような武器を構えて先端に付いているのをバズーカのように発射するとパトカーやビルに当たり爆発した。

「アリア、無事か!？」

「平気よ別に」

キンジとアリアは何とか軽傷で済み歩いてくるズゴーミン一体にキンジが銃を撃つとズゴーミンの顔に当たった。

「ズゴ？」

「やべえ……………」

ズゴーミンの一体がキンジに気付いてクローを向けた。

「キンジ!？」

アリアはズゴーミンを撃つがゴーミンが邪魔で当たらず逆にゴーミンから狙われていた。

「おのれよくも」

「喋った」

キンジは別の事に驚くがクローにはエネルギーが溜まり何時でも撃てる状態だった。

「くっ！？」

キンジは目を瞑ったが、

「ズゴー！？」

何かの銃撃音とズゴーミンの悲鳴に似た叫びが聞こえ目を開けるとズゴーミンが腕を押さえていた。

「一体……」
「「「ゴー!？」」」

キンジがゴーミンの声をした方を見るとアリアの周りにいたゴーミン達が次々と倒れていく。

「誰が……」
「キンジ! あそこ!」

アリアが指さした先には海がゴーカイガンを持って歩いてきていた。

「お前、一体？」
「つて、逃げなさいよ!」

海はアリアの言葉を見無視してズゴーミンの前に立った。

「ちよつとっ!？」
「早く逃げろ!!」

キンジとアリアが海に逃げるように言いそれをビルの影から集といのりが見ていた。

「断る」

「何考えてるの!？」

「無理だ! 逃げろ!！」

「気に入らねえ奴はぶっ潰す。それが……………」

海はレンジャーキーとモバイルーツを取り出した。

「海賊だ」

海はモバイルーツとレンジャーキーを構えて叫んだ。

「豪快チェンジ!！」

海はモバイレーツにレンジャーキーを入れた。

【ゴーカイジャー！】

海の姿は赤い海賊のような、ゴーカイレッドになると右手に剣、ゴーカイサーベルを握り左手にゴーカイガンを持った。

「ゴーカイレッド！ 派手に行くぜ！！」

ゴーカイレッドはゴーカイガンを撃ちゴーミン達を倒しながら走り出し向かって来るゴーミン達をゴーカイサーベルで切っていく。

「オラア！！」

ゴーカイレッドはゴーミンに回し蹴りを喰らわせるがゴーミンが一齐にバズーカを撃つがゴーカイレッドはゴーカイサーベルでバズーカの弾を切っていく撃ってきたゴーミン達をゴーカイガンで撃ち近付いてきたゴーミンにゴーカイサーベルを刺すと遠くにいたゴーミ

ンをゴーカイガンで撃つ。

「すげえ……………」

「何なの、あいつ」

キンジとアリアはゴーカイレッドの戦いを見て唖然とした。

「あれが、海賊」

「……………」

見ていた集といのりも唖然としていたがゴーカイレッドはゴーミンの圧倒的な数に苦戦していた。

「流石に多いな」

ゴーカイレッドは腰に付いているゴーカイバックルから新たなレンジャーキーを取り出しモバイレーツに入れた。

「豪快チェンジ!!」

【ゴセイジャー!】

ゴカイレッドは赤い天使のようなスーツにドラゴンがシンボルのゴセイレッドになると赤い剣、スカイクソードを取り出した。

「スカイクソード! ハッ!!」

ゴセイレッドはスカイクソードでゴミンを切るとゴセイレッドは飛びながらゴミン達をスカイクソードで切っていく。

「次行くぜ!!」

ゴセイレッドは新たなレンジャーキーを取り出しモバイレーツに入れた。

「豪快チェンジー!!」

【ジューウレンジャー!】

ゴセイレッドはティラノサウルスを用いたスーツの恐竜戦隊ジューウレンジャーのティラノレンジャーになると剣、龍撃剣を取り出しゴーミンを切る。

「ズゴー!!」

ズゴーミンの一体がティラノレンジャーにレーザーを放つがティラノレンジャーはそれを龍撃剣で弾いた。

「うおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」
「!」
「ズゴー!!」

ズゴーミンも駆け出すとティラノレンジャーはジャンプしズゴーミンもジャンプするが、

「ティラノスラッシュュー!!」

空中で切るティラノスラッシュを受けてズゴーミンは爆発した。

「ズゴー!?!」

ティラノレンジャーは着地すると新たにレンジャーキーを取り出した。

「豪快チェンジ!!」

【オーレンジャー!!】

ティラノレンジャーはゴーグルが星形の赤い戦士、超力戦隊オーレンジャーのオーレッドになるとゴーグルから剣、スターライザーを取り出した。

「ハッ!!」

「「「ゴー!?!」」」

スターライザーでゴーミンを切るとスターライザーを左手に持ち右腰のホルスターからキングブラスターを取り出し遠くのゴーミン達を撃ちスターライザーとキングブラスターを入れ替えてゴーミン達が振り下ろした棒をスターライザーで防ぎキングブラスターで撃ち抜いた。

「「「ゴー!?!」」」

「ズゴー!!」

オーレッドが見るとズゴーミンの一体が向かってきてクローをスターライザーで止めると向かってくるズゴーミンを銃で撃つキンジとアリアの姿が見え目の前にいるズゴーミンに蹴りを入れた。

「邪魔だ」

「ズゴ！？」

オーレッドはもう一体のズゴーミンの背中をキンググブラスターで撃つと蹴ったズゴーミンが向かってきてクローを振り下ろすがオーレッドは避けてキンググブラスターで何度も撃った。

「ズゴッ！？」

オーレッドはスターライザーを一回時計回りに回した。

「秘剣・超カライザー！！」

「ズゴー！？」

オーレッドがスターライザーでズゴーミンは爆発してオーレッドはゴークイレッドに戻った。

「後一仕事、オラア!!」

ゴーカイレッドは近付いてきたズゴーミンに回し蹴りを決め背後から来たズゴーミンをゴーカイサーベルで切り立ち上がったズゴーミンを何度もゴーカイガンで撃った。

「ズゴッ!?! ズゴッ!?! ズゴー!?!」

ズゴーミンが倒れるとゴーカイレッドはゴーカイサーベルを肩に乗せた。

「終わりだ」

ゴーカイレッドはゴーカイサーベルにあるスイッチを押しゴーカイシリンダーを出すとレンジャーキーをセットした。

【ファッイナルウェーブ!】

「ハアアアアアア………ッ」

ゴークイレッドはゴークイサーベルを構えてズゴーマンが立つと振り抜き斬撃を飛ばす、ゴークイスラッシュを放った。

「ズッゴーク!?」

ズゴーマンはそのまま倒れて爆発した。

「二丁上がり」

ゴークイレッドは変身を解いて海の姿に戻った。

「ほほう、あの海賊は一人か」

それを宇宙にある城からモニターで見ていた黒十字王が笑みを浮かべた。

「ならば樂に漬せる。フフツ．．．．フハハハツ．．．．ハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！！！！！」

城には黒十字王の笑い声が響いた。

「ふう、
帰るか」

海はゴーカイガレオンに向かって歩く。

「ちょっと待ちなさいよ!!」

「あっ？」

海はアリアに呼び止められて立ち止まった。

「さっきのは何よ!? それに海賊って……」

「答える気はねえな……」

「はぁ!? 何よ、教える位良いじゃない!!」

「アリア落ち着け。それと、俺達を助けてくれたのか？」

「あいつ等が気に喰わなかっただけだ」

キンジ達の言葉に海は素っ気なく返すと来た道に戻っていく。

「後お前は堂々としてろ」

海が言うとビル影から集が苦笑いしながら出てきてその後にいりふゆーねるも出てきた。

「ふう、たくつ」

海がゴーカイガレオンに戻っていく姿を四人と一体は黙って見ていた。

第1話 海賊降り立つ（後書き）

次回はどうなるやら。

お楽しみに。

第2話 ライダーと海賊（前書き）

ツツガミも変換できないなんて、呪われてるのか？

まあ、良いや。あのロケットライダーも登場。

第2話 ライダーと海賊

「んっ・・・・・・・・んっ・・・・・・・・何だここ？」

海は目を開けると白い空間にいて目を擦った。

「あー・・・・・・・・眠っ・・・・・・・・」

海はそのまま瞼を閉じて眠ろうとする。

「おい、起きろ」
「あっ？」

海は呼ばれる声がして目を開けると神が立っていた。

「用事なら簡潔に済ませ」
「寝ながら聞くな」

神が海の頭を揺ると海は神の顔を見た。

「何だ」

「いや、調子はどうかな」と

「別に、体力や反射神経などが上がった位だ。って、お前か、体力上昇などは」

「まあ、な」

「礼は言っておく」

「ああ、なら頑張れ。それだけだ」

海の目の前が光り出し海は目を瞑った。

「んっ・・・・・・・・夢か・・・・・・・・」

海は起きると伸びをしてコートを羽織り寝室を出た。

海はレンジャーキーが入った宝箱がある部屋に來ると宝箱を開き中を探りレンジャーキーを一つ取り出した。

「さて、散歩するか」

海は手に握ったレンジャーキー、特捜戦隊デカレンジャーのデカマスタアのレンジャーキーを宝箱の中に仕舞った。

海は街に降りると商店街を歩いていた。

「さて、どこに行くか」

海は道を歩いていると歩道橋からお婆さんが袋に入った林檎を落としたのが見えた。

「おっ」

「あっ」

海と同じタイミイングで林檎を赤い髪の少女が拾った。

「ほらよ」

「はい、婆ちゃん」

「ありがとうね。二人共。これはお礼だよ」

海と少女はお婆さんから林檎を一つずつ受け取った。

「ありがとうな。婆さん」

「おう。ありがとうな、婆ちゃん」

お婆さんが立ち去ると海は暫く見ていた。

「ふう、林檎か」

「何だ、食わねえのか？」

「いや、食うぜ」

海が林檎をかじると少女も林檎をかじった。

「うめえな」

「そうだよな」

二人して林檎をかじりながら暫く歩いていた。

「それにしてもうめえ」

「そうだよな。にしてもあんた、学校はどうなんだよ」

「そう言うてめえも、どうなんだ」

「生憎、行っていないんでな」

「奇遇だな。俺もだ」

二人は林檎を食べ終わると林檎の芯を近くのゴミ箱に捨てた。

「この街、わかりずれえな」

「ならあたしが案内してやろうか？」

「別にいいんだが」

海はふと足を止めた。

「そう言えば名前聞いてなかったな。俺は赤旗海。てめえは？」

「佐倉杏子だ。婆ちゃんから貰った林檎、美味かったな」

「それかよ。まあ、美味いは美味いが」

海は少女、佐倉杏子と話しているとふとある学校が目に入った。

「何だ？ あそこ」

「ああ、あそこは天ノ川学園高校って言う学校だ」
「へえ」

二人が学園を見ていると学園から悲鳴が聞こえ海はすぐさま向かった。

「ちよっ！？ あんた！！」

海は学園の門に手を付き乗り越えた。

学園では中庭で体にオリオン座のあるオリオンゾディアーツがゆっくり歩いていた。

「あれって、まさか」

「体に星座、ゾディアーツ」

集といのりはオリオンゾディアーツの姿を見て唖然としていた。

「こいつっ！！」

キンジやアリアなどの武偵の生徒達は銃でオリオンゾディアーツを撃っていた。武偵とは武装を許された探偵の事で様々な科があり天ノ川学園高校は武偵の生徒の育成も行っていた。

「くっ・・・・・・・・」

全く怯まないオリオンゾディアーツの様子にキンジは苦虫を噛んだような顔をした。

「この!!」

「待てアリア!!」

アリアは二丁の銃を仕舞い日本の刀を出しオリオンゾディアーツに切りかかるが全く効かなかった。

「嘘……」

オリオンゾディアーツはアリアの手を掴むと教室に向かって投げるとアリアは窓ガラスを突き破って教室の机にぶつかった。

「アリア!？」

「キンちゃん前!!」

「なっ!？　ぐわあ!？」

キンジはオリオンゾディアーツに殴られ壁にぶつかりキンジに向かって叫んだ少女、星伽白雪が近寄った。

「キンちゃん平気！？」

「ああ、何とか（防弾制服じゃなかったら、折れてた）」

キンジはオリオンゾディアーツの怪力に冷や汗を流しそれを見ていた武偵の生徒達が逃げ出していく。

「キンジ、どうすんのよ」

アリアがキンジ達に近寄ってきたが数力所切り傷があった。

「みんな！！」

「理子！！」

キンジ達に金髪の少女、峰理子が近寄ると手を掴んだ。

「ここは一回逃げよう！！」

「確かにその方が……………」

オリオンゾディアーツの力を考えた白雪と理子はそう言うが実はまだ生徒の避難がまだ終わっていない為キンジは引くに引けなかった。

「みんなは避難の誘導を」

「キンジ？」

「俺が囧になる」

アリア達が驚いたのも束の間、キンジは銃を発砲しながらオリオンゾディアーツを引き寄せる。

「こつちだー!!」

だがオリオンゾディアーツはキンジを無視して進もうとした。

「クソッ!!」

「うおおおおおおおおおおおおお!!」

「おい明久!？」

一人の生徒が鉄パイプを持ちオリオンゾディアーツに向かい友達である生徒が呼び止めるが少年、吉井明久は鉄パイプでオリオンゾディアーツを殴るが逆に鉄パイプが曲がった。

「えっ？」

明久の思考が一回停止しオリオンゾディアーツが鉄パイプを掴んだ時に気付いたが明久はオリオンゾディアーツに鉄パイプごと投げられた。

「ぐわあ！？」

「「「^{アキ}明久（明久君）！？」」」

明久に駆け寄る体格の良い生徒、坂本雄二とショートカットの女子、島田美波にピンクの髪の姫路瑞希、女子に見える少年、木下秀吉、もう一人の少年、土屋健太通称ムツリ二が駆け寄った。

「お前バカだろ！！ バカだろ！！」

「バカ言うな！！ 何となく効くと思って」

「無理じゃ。銃が効かぬ時点で」

「取り合えず逃げないと!!」

「明久君、立てますか？」

「・・・・・・来る」

オリオンゾディアーツは明久達に近寄りキンジはオリオンゾディアーツの背中を撃つが明久達に向かっていく。

「この!!」

アリア、理子も撃つがオリオンゾディアーツには効き目がなく星座の部分が光り出した。

「不味い!!」

「うおおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

集がオリオンゾディアーツの頭を鉄パイプで叩いた。効き目はないが気を引くには十分だった。

「ぐわあ!？」

「集!!」

集はオリオンゾディアーツに殴られ飛ぶといのりが集に駆け寄った。オリオンゾディアーツが周りを見渡しているとオリオンゾディアーツの背中から火花が出た。

「まさか……………」

集が目にしたのはゴーカイガンを撃ちながら歩いてくる海の姿だった。

「あんた!？」

一度見た事があったキンジヤアリア、いのりは驚き明久達は首を傾げた。

「取り合えず逃げろ」

「あなたは？」

「ただの海賊だ」

海はモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジー!!」

【ゴーカイジャー!】

海はゴーカイレッドに変わるとゴーカイサーベルとゴーカイガン
構えた。

「派手に行くぜ!!」

ゴーカイレッドはオリオンゾディアーツをゴーカイサーベルで切り
腹に蹴りを入れた後ゴーカイガン撃つがオリオンゾディアーツも
殴りかかってくる。

「あんまり効果ないな。ならこいつか」

ゴーカイレッドはゴーカイバツクルからレンジャーキーを取り出した。

「豪快チェンジー!!」

【ゲーキレンジャー!!】

ゴーカイレッドは狼のようなマスクに紫のスーツの獣拳戦隊ゲキレンジャーのゲキヴァイオレッドになった。

「紫になった!!」

明久達が驚くがゲキヴァイオレッドはムエタイのような構えをする

とまずオリオンゾディアーツの顔面を殴り頭を掴むとそのまままた顔面に膝蹴りを入れた。

「次だ」

ゲキヴァイオレットは新たにレンジャーキーを取り出しオリオンゾディアーツが向かってくると腹に蹴りを入れた。

「邪魔だ。豪快チェンジ!!」

【アーバレンジャー!】

ゲキヴァイオレットは白くトップゲイラーを用いたマスクの爆竜戦隊アバレンジャーのアバレキラーになり羽根ペンのような武器、ウイングペンタクトをブレードモードにしてオリオンゾディアーツに切りかかる。

「ウイングペンタクト!!」

アバレキラはオリオンゾディアーツを横一閃に切ると下から上へ切りオリオンゾディアーツが上空に上げた。

「ときめくぜ。オラア!!」

アバレキラは飛び上がると落ちてくるオリオンゾディアーツを切りオリオンゾディアーツは地面に落ちるとアバレキラは地面に着地した。

「さて、そろそろ終わりにするか」

アバレキラはオリオンゾディアーツにウイングペンタクトを向けるがオリオンゾディアーツは体にある星座の部分から光弾を放ちアバレキラはウイングペンタクトをペンモードにして矢を書き光弾を相殺するがその間にオリオンゾディアーツに逃げられた。

「逃げられたか」

アバレキラーは海に戻ると海は門に向かって歩きだした。

「ちょっと待てよ」

そんな海を雄二が呼び止めた。

「何か用か？」

「さっきのあれは何だ？ それにあの怪物は何だ」

「怪物は知らないが、教える気もない」

「おい！！」

「あつ！！ ちょっとあんたに聞きたい事が・・・・・・・・って足早
いし」

海が走り出しアリアが追いかけようとするが既に海は遠くにいた。

「はぁ、どうなんだよ」

キンジは頭を抱えて溜め息を吐いた。

あるビルの一室で金髪の青年が電話で誰かと話していた。そしてテーブルには四つのスイッチがはめられた機械があった。

「ゾディアーツが？ それは本当か、集」
『うん。僕等実際に見たから、そうだと思う』

金髪の青年、ツツガミ涯は四つのスイッチがはめられた機械、フォゼドライバーを手を取った。

「集、今からそっちに行く」
『わかった』

涯は電話が切れたのを確認するとフォーゼドライバーを仕舞い部屋を出た。

「あつ、涯」

「ツグミか」

涯が部屋を出ると頭に猫耳がある少女、ツグミが居た。

「どっか行くの？」

「ああ、後を頼む」

「アイ！」

涯はそのままビルを出た。

「よつと」

海は門を飛び越えると辺りを見回した後行こうとするが……

「どこ行くだよ？」

「ん？」

海が見てみると門の所で杏子が寄りかかっていた。

「まだ居たのか」

「待っててやったのにそれはねえだろ」

「わりいな。後は好きにフラフラするから、もう良い」

「ならあたしもフラフラしてるよ」

そのまま海と杏子は別れ暫く杏子が歩いているとガラスを引っ掻く
用な音が杏子の耳に聞こえた。

「ふう、食後の準備運動だな」

杏子は近くにあるガラスを見るとポケットから蝙蝠のマークがある黒い四角い物を取り出すと杏子が見ている鏡に大きな蝙蝠が杏子の隣に写ったが杏子の隣には何も居なかった。

その後天ノ川学園は臨時休校になり生徒達が帰る中集といのりは校門に立っていた。

「集、いのり。来たぞ」

「涯・・・・・・・・」

「手短に状況を教えろ」

待っていた二人の元に涯が来ると集は状況を話し始める。

「僕等が騒ぎを聞いて行ってみたらゾディアーツが居て、暫くして自称海賊の」

「撃退したのはそいつか」

「涯、どうする？」

「集といのりはその海賊を捜せ。ゾディアーツは俺が何とかする」

「わかった！」

集は頷くと走り出しのりも集を追い涯は一人考えた。

（もうここには居ないかもな、なら街か）

涯もゾディアーツを追って走り出した。

海は街を歩きながらゴーカイレッドのレンジャーキーを青、黄、緑、ピンクの色のレンジャーキーを握っていた。

「さて、後四人。誰にするか」
「四人が何？」

「お前との関係あるのか？」

「それはって……あれ？」

海の両脇に何時の間にかアリアとキンジが居た。

「……まさかな」

海は逃げようとするがアリアとキンジは既に海の両腕を掴んでいた。

「逃げられないぜ」

「と言う訳だから答えなさい」

「ええー」

海は露骨に嫌な顔をした。

「あつ、見つけた!!」

そこへ集といのりも来た。

「マジで面倒だな」

海は大きな溜め息を吐いた。

「で、話す気になったか？」
「あいな」

その次の瞬間、爆発音が鳴り海は隙をついて拘束を振り払い爆発音の方へ向かった。

爆発音が鳴った場所では大量のゴーミンとズゴーミン三体に黒い体に銃を持ったシカバネンが居た。

「黒十字王！ 復活したシカバネンのやり方を特にご覧下さい！！」

シカバネンが空を向かって叫ぶとゴーミンはバズーカを撃ち人々は逃げ出す。

「お前等、何人たりとも逃がすな！！」

「ズゴー！！」

「ズゴー！！」

シカバネンが歩こうとすると足下が撃たれシカバネンは歩みを止めた。

「またこのパターンか」

海がゴーカイガンを構えている所が目に入り海はレンジャーキーとモバイレーツを構えた。

「豪快チェンジ!!」

【ゴーカイジャー!】

海はゴーカイレッドになるとゴーカイサーベルとゴーカイガンを構えた。

「ゴーカイレッド! 派手に行くぜ!!」
「ふん、やれ!!」

シカバネンの合図を受けゴーミン達とズゴーミン達は走り出しゴーカイレッドは近付いてくるゴーミンとズゴーミンをゴーカイサーベルで切り撃っていく。

「くっそ!！」

ゴーカイレッドはズゴーミンの腹を蹴るとシカバネンに向かって走り出す。

「喰らえ!！」

ゴーカイレッドはゴーカイガンをしカバネンに向かって撃つがシカバネンは受けるが銃をゴーカイレッドに向かって撃った。

「ぐわあ!？」

ゴーカイレッドは転がるとズゴーミンがクローからレーザーをゴーカイレッドに向かって撃った。

「ガッ!？」

立ち上がるゴーカイレッドにゴーミン達が棒で何度も殴り付ける。

「うわぁ!?!」

ゴーカイレッドはゴーミン達のバズーカを受けるて飛び近くにゴーカイサーベルとゴーカイガンを落としゴーカイレッドから海に戻った。

「くそう……………」

海は口から血を流していた。

涯は街中でゾディアーツを探していた。

「どこに居るんだ？ ゾディアーツは」

涯がゾディアーツを搜索していると遠くで爆発音になった。

「何の騒ぎだ？ ゾディアーツか？」

涯はゴーカイレッドとシカバネン達の戦闘音をゾディアーツの騒ぎだと思い向かうとした。

「うわあああああああああああああああ！！！」

「きゃあああああああああああああああ！！！」

悲鳴が聞こえ涯が見てみるとオリオンゾディアーツが居た。

「こんな所に居たか」

涯はフォーゼドライバーを腰に付け赤いスイッチを順に下ろしていく。

「何、やってるんだろ？ あの人」

そこに偶然雄二達と避難しようとしていた明久が見ていた。

【3・・・2・・・1】

カウントダウンがなり涯はレバーを掴んだ。

「変身！！」

涯はレバーを押し右手を上へ、左手を左斜め下にとすると光の輪が現れ涯を包むとジェット噴射の用に煙が出ると涯は頭がロケットに宇宙飛行士のようなオレンジの複眼の仮面ライダーフォーゼに変身し

た。

「凄い………」

「明久!!」

明久は啞然していると雄二達も来た。

「何じゃあれは？」

「わかんない」

当然のように雄二達もフォーゼを見て啞然としていた。

「ハッ!!」

フォーゼはオリオンゾディアーツに殴りかかりオリオンゾディアーツは殴り返そうとするがフォーゼは屈むと腹を蹴った。

「早く、逃げる……」
「うう……」

子供は半ベソ状態だったが頷き逃げた。

「くっ!？」

涯はフォーゼドライバーを掴もうとするがその前に明久がフォーゼドライバーを取った。

「お前、何を？」
「……」

明久は無言でフォーゼドライバーを腰に付けた。

「明久、何する気だ？」
「アキ？」

「明久君！」

明久は雄二達を見た後スイッチを入れていく。

「まさか！？ やめろ！ それは俺がやる！！！」
「・・・・・・・・・・見てるだけはやなんだ」

【3・・・】

フォーゼドライバーのカウントダウンが始まった。

「僕にだって、出来る事があるはずだから」

【2・・・】

明久はレバーを握んだ。

「だから僕はやるんだ!!」

【１・・・】

フォーゼドライバーのカウントダウンが終わり涯は明久の目を見ると確かな決意があった。

「変身!!」

明久はレバーを押し右手を上へ、左手を斜め下にやるとフォーゼに変身した。

「宇宙・・・・・・・・キターーーー!!」

フォーゼは屈むと両手を万歳ようにあげた。

「終わりだな」

海はシカバネンに銃を突きつけられていた。

「あゝばいよ」

「くっ!？」

海は目を瞑るが数回の銃撃音なり目を開けるとシカバネンが腕を押さえていた。

「うおおおおおおおおおおおおおー!!」

集がゴーカイサーベルを握りシカバネンを切りいのりはゴーカイガンをもちシカバネンを撃った。

「お前等、何で」

海は驚いた様子で四人を見た。

「あんたから事情聞いてないからよ」

「それとヤバそうだからな」

「人助け、でしょ」

「こつちも聞きたい事……あるから」

海は立ち上げると笑った。

「お前等、気に入ったぜ」

海は懐から四本のレンジャーキーを取り出し集に青、アリアに黄色、

キンジに緑、いのりにピンクのレンジャーキーを渡した。

「これは？」

「それは海賊戦隊ゴーカイジャーのレンジャーキーだ」

「海賊戦隊………」

「ゴーカイジャーの………」

「レンジャーキー………」

海は四人を見た。

「これからどうするか、お前等が決めろ」

海は四人にモバイレーツを渡した。

「やるよ。僕は、そう決めたから」

「うん………私も」

「やってやるわよ」

「ああ、当たり前だ」

四人はレンジャーキーとモバイレーツを構えた。

「へっ、行くぜ」

海もレンジャーキーとモバイレーツを構えた。

「何なんだお前等!？」

海達はシカバネンの問いには答えなかった。

「「「豪快チェンジ!」「」」」

【ゴーカイジャー!】

海達の姿は海はゴーカイレッド、集はゴーカイレッドのスーツを青

くしたゴーカイブルー、アリアはスーツを黄色くしたゴーカイエロー、キンジはスーツを緑にしたゴーカイグリーン、いのりはスーツをピンクにしたゴーカイピンクになった。

「ゴーカイレッド！」

「ゴーカイブルー！」

「ゴーカイエロー！」

「ゴーカイグリーン！」

「ゴーカイピンク！」

「『海賊戦隊ゴーカイジャー！』！』」

ゴーカイレッド達はゴーカイサーベルとゴーカイガンを構えた。

「五人揃ったんだ。何時もより派手に行くぜ！！」

ゴーカイレッド達はゴーカイガンでゴミン達を撃っていく。

「行くぜ！！」

ゴークイレッドはズーミンとゴーミン達をゴークイサーベルで切りゴークイガンで撃っていく。

「ハッ！！」

「ズー！？」

ゴークイブルーはすれ違いざまにゴークイサーベルで切りゴーミン達をゴークイガンを撃った。

「風穴開けるわよ！！」

ゴークイイエローはゴークイガンでゴーミンを撃ちゴークイサーベルで近寄ってきたゴーミンを切った。

「うらあ！！」

ゴークイグリーンはゴークイサーベルでズーミンを切り近くでゴ

ーカイガンを何度も撃った。

「ふっ・・・」

ゴーカイピンクはゴーカイサーベルでゴーミンを刺し更にゴーカイガンでゴーミンを撃つ。

「いのり!」

ゴーカイブルーがゴーカイピンクの近くに来ると背中合わせになった。

「行ける!」

「うん・・・」

ゴーカイブルーはゴーカイピンクにゴーカイガンを渡しゴーミンに刺さっているゴーカイサーベルを抜いた。

「行こう！」
「わかった」

ゴーカイブルーは二刀流でズゴーマンを切りつけゴーミン達も切りつけていきゴーカイブルーが屈んだ所にゴーカイピンクが二つのゴーカイガン撃った。

「ズゴーマン!?」

ズゴーマンは電気を発しながら爆発した。

「ふっ！ はっ！」

ゴーカイイエローはゴーカイガンでズゴーマンを撃っていた。

「アリアー！」
「キンジー！」

ゴークアイグリーンはゴークアイイエローの近くに来るとゴークアイグリーンはゴーマンを蹴り飛ばした。

「これ、いるか？」

「あつ、借りる」

ゴークアイグリーンはゴークアイイエローにゴークアイガンを渡しゴークアイイエローはゴークアイグリーンにゴークアイサーベルを渡した。

「行くわよ！！」

「わかってる！！」

ゴークアイイエローはズゴーマンをゴークアイガンで何度も撃ちゴークアイイエローは屈みゴークアイグリーンはゴークアイイエローを飛び越えゴークアイサーベルでズゴーマンを何度も切った。

「はっ！　　アリア！！」

「オツケーー!!」

ゴーカイグリーンはズゴーマンを蹴り飛ばしゴーカイイエローはゴーカイグリーンの肩を使い上に上がるとゴーカイガンで何度も撃った。

「ズツ、ズゴー!?!」

ズゴーマンは電気を発しながら爆発するとゾーマンが向かっていた。

「行くぞ」

「ええ」

ゴーカイレッドはゴーカイサーベルでズゴーマンを切りゴーカイガンでゾーマンを撃っていた。

「オラァー!!」

「ズゴッ!?!」

ゴーカイレッドがズゴーマンを蹴り飛ばすと更にゴーカイガンで撃ち止めと言わんばかりにゴーカイサーベルでズゴーマンを横一閃に切り裂いた。

「ズゴツ！？ ズゴー！！」

ズゴーマンはクローをゴーカイレッドに振り下ろそうとするがゴーカイレッドはズゴーマンにゴーカイガンを撃ちズゴーマンの腹を蹴るとゴーカイサーベルでズゴーマンを切った。

「ズゴー！？」

ズゴーマンが爆発するとゴーカイブルー、ゴーカイイエロー、ゴーカイグリーン、ゴーカイピンクが来た。

「やるじゃねえか」
「まあね」

「当たり前よ!!」

「まだ居るぞ」

「来る」

シカバネンが五人の前に立った。

「見ていたが、もう飽きた。終わりだ!!」

シカバネンは銃やミサイル、レーザーをゴークイジャーに向けて撃った。

「「「うわあああ!?!」」」

ゴークイジャーが居た場所は爆炎に包まれた。

「ハア！！」

フォーゼはオリオンゾディアーツを殴るが特にダメージはなく続いてオリオンゾディアーツの胸部を蹴った。

「一番右端のスイッチを押せ！！」

「右端？」

フォーゼは涯に言われ一番右端にある。のロケットスイッチを押した。

【ロケットノオン】

フォーゼの右腕にロケットの形のロケットモジュールが現れた。

「凄い……………」

フォーゼは暫くロケットモジュールを見ていたがロケットモジュールが火を噴かすとフォーゼはロケットモジュールに引かれるようにオリオンゾディアーツを殴った。

「うわあああ！？ 止まらないいいいい！！！」
「だったらスイッチ切れ！！！」

フォーゼはロケットスイッチを切るとロケットモジュールがなくなりフォーゼは一息ついた。

「何かないかな？」

フォーゼは次に×のランチャースイッチを入れた。

【ランチャー／オン】

フォーゼの右足にランチャーモジュールが現れて足をあげた。

「何これ？」

フォーゼが足を下ろすとミサイルがオリオンゾディアーツを外れ周りに当たった。

「周りに被害を与えてどうする！？ 左端のレーダーでロックオンしろ！！」

「左端の？」

フォーゼは左端のレーダースイッチを入れた。

【レーダー／オン】

フォーゼの左腕にレーダーモジュールが現れオリオンゾディアーツに向けロックオンした。

「ミサイル発射!!」

ランチャーのミサイルは全てオリオンゾディアーツに当たりフォーゼはランチャースイッチとレーダースイッチを切った。

「よし、止めだ!!」
「待て!!」

フォーゼは涯の制止を聞かずロケットスイッチとのドリルスイッチを入れた。

【ロケット/オン】
【ドリル/オン】

フォーゼにロケットモジュールと左足にドリルモジュールが装備された。

「行くよー!!」

フォーゼは上空に上がりレバーを押した。

【ロケットノドリルノリミットブレイク】

ドリルモジュールが回転し向けるとフォーゼはオリオンゾディアーツに向かう。

「ロケットドリルキーーック!!」

フォーゼのロケットドリルキックはオリオンゾディアーツを捉えオリオンゾディアーツを貫きオリオンゾディアーツは爆発するとフォーゼのドリルモジュールは地面に刺さり暫く回っていた。

「あわあわあわあわあわ」

回転が止まるとフォーゼはロケットスイッチとドリルスイッチを切った。

「目、目があゝ」

「たく・・・・・・・・」

喜んでいる雄二達を余所に涯は険しい表情をした。

「終わったか」

シカバネンはその場を去ろうとするがいきなり背中を撃たれた。

「ぐわあ!？」

シカバネンが振り返る。ゴーカイレッド、ブルー、イエロー、グリーン、ピンクの順番でゴーカイサーベルでシカバネンを切った。

「ガハッ!？」

シカバネンが転がるとゴーカイレッド達はゴーカイガンを構えた。

「一気に行くぜ!！」

ゴーカイレッドがゴーカイガンのゴーカイシリンダーを立てるとゴーカイブルー達もゴーカイシリンダーを立てレンジャーキーをセットした。

【ファッイナルウェーブ!】

「ハアアアアア……！」

ゴーカイレッド達はゴーカイガンをしカバネンに向けた。

「ゴーカイブラスト！」

ゴーカイジャーは一斉にゴーカイガンの引き金を引き弾丸を撃つ、
ゴーカイブラストをしカバネンに撃ち全て命中した。

「ぐわあああああ！？」

シカバネンは叫び声を上げ爆発した。

「僕達、勝ったんだ」

「ああ、そうだな」

「何か、ピンと来ないけど」

「うん」

ゴークイブルー達は啞然としていた。

第2話 ライダーと海賊（後書き）

次回 第3話

【宇・宙・激・闘】

お楽しみに。

第3話 宇・宙・激・闘（前書き）

長いし、グダグダ・・・・・・・・orz

第3話 宇・宙・激・闘

「よっし！ やったー！！」

フォーゼは喜んでいると涯はフォーゼに近付きスイッチを切りフォーゼの変身を解くとフォーゼドライバーを取り上げた。

「えっ？」

「お前にはフォーゼは無理だ」

「そんな事言わなくて良いじゃないですか！！」

涯が明久に冷たく言うと言瑞希が怒鳴った。

「こいつは失敗をした。ゾディアーツはスイッチを切らなければ倒せない。だからだ」

涯は冷たく言うとその場を去っていった。

「後、追い掛けよう」

「アキ？」

「何か、悔しいから」

「・・・・・・行こう」

「そうじゃな」

明久達は涯の後を追いつけた。

ゴーカイレッドは変身を解き海に戻ると集達も変身が解けた。

「行くぞ」

「どこによ」

海はモバイレーツを取り出し5、5、0、1、エンターを押した。

【ゴーカイガレオン！】

その音声と共に海達の上空に来た。

「海賊船の中だ」

ゴーカイガレオンから五本のロープが降りると海が一本を掴むと集達も掴みゴーカイガレオンに入っていた。

「凄い・・・」

「中はこうなってるのね」

ゴーカイガレオンに入った四人は中を見て唖然としていた。

「どんな所を想像したのとさっさと入れ」
「おわあ!？」

海が入り口にいる四人の内、キンジに蹴りを入れ中に入り椅子に座った。

「いつてえ」
「まるで船長」
「この船の船長は俺だ」

キンジが蹴られた背中をさすり、いのりは海の様子を見てそう言う
と海はいのりの言葉に頷いて言い、集達は暫く啞然として……………

「「ええー!？」」」
「……………」

集、アリア、キンジは驚きのあまり声を上げ、いのりも目を見開いていた。

「そんなに驚くな。それにこの船は俺のだ。船長だろうがおかしくないだろ」

海の言った事は正論だった。船の所有者が船長じゃない方がおかしい。

「よし早速だ。集、ゴーカイブルーになれ」

「えっ？ どうして」

「良いからなれ」

集はモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジー!!」

集はゴーカイブルーになると海はレンジャーボックスを開け一つのレンジャーキー、電磁戦隊メガレンジャーのメガブルーのレンジャーキーを取り出した。

「こいつを頭にイメージして、腰に付いてるゴーカイバックルのボタンを押せ」

「う、うん」

海はメガブルーのレンジャーキーをレンジャーボックスにあるレンジャーキーの山の上に置き、ゴーカイブルーがゴーカイバックルのボタンを押すとメガブルーのレンジャーキーが消えゴーカイブルーのゴーカイバックルから出てきた。

「えっ！？ どうなってるの!？」

「頭でイメージすれば出てくるって話だ」

「あっ、これ」

いのりはレンジャーボックスからオーレッドのレンジャーキーを取り出した。

「勝手に取るな」

海はいのりからオーレッドのレンジャーキーを取りレンジャーボックスの中に入れた。

「他に何が入ってるのかな？」

「ちょっと見てみるか」

「おい！」

集とキンジはレンジャーボックスの中を漁り始めた。

「あつ、これ」

集は星獣戦隊ギンガマンのギンガレッドのレンジャーキーを取り出した。

「これって星獣戦隊ギンガマンのギンガレッドでしょ？」

「……知ってんのか？」

「ちよつとだけ」

海は啞然としていた。まさかスーパー戦隊の一つを知っているとは思ってもいなかったからだ。海がスーパー戦隊を知ったのは神に使い方を教えられた時に一緒に知識として流れたからだ。

「何で知ってるんだ？」

海はさり気なく集に何故知っているかを聞いてみた。

「昔テレビでやってたんだよ」
（テレビ？　　と言う事だ？）

海は頭を悩ませた。実はこの世界はスーパー戦隊はテレビの中の空想としてよく知られていた。

「後は、救急戦隊ゴーゴーファイブとかな」

キンジが取り出したのは救急戦隊ゴーゴーファイブのゴーレッドの

レンジャーキーだった。

「お前もか」

「ああ、けどちょっと見たただけだし」

海は頷きながら二人からレンジャーキーを取るとレンジャーボックスに入れた。

「さてと」

海はレンジャーボックスの閉じると携帯の着信音が鳴った。

「・・・・・・・・誰だ？」

「私・・・・・・・・」

海が聞くといのりが携帯を取り出し誰かと少し話し携帯を閉じた。

「来て欲しい所がある」

「「「・・・・・・？」」「」」

「まさか、ね」

いのりの言葉に海、アリア、キンジは疑問を浮かべ、集は苦笑いしていた。

涯はあるビルの前に立ち周りを見渡した後、そのビルの中に入った。

「ビルの中、入ったね」

「そうだな」

「会社、かもね」

明久達は数回見回した後ビルの中に入っていた。数分後、ゴーカイガレオンがビルの近くに來ると錨を下ろし五本のロープが下りる

とそれを伝い海、集、いのり、アリア、キンジが降りた。

「ここか」

「うん……」

「まあ、入ろう」

海、集、いのりはビルに入ったがアリアとキンジはお互いに顔を見合わせた。

「俺等も、入るのか？」

「取り合えず、入るわよ」

二人は先に入った三人を追った。

ビルの中は必要最低限の明かりしかなく薄暗かった。

「薄暗いな」

「これ、テロ組織？」

「・・・・・・違う」

「テロ組織だったら人助けしないでしょ」

明久達は完全に涯を見失い、色々な場所を探っていた。

海、アリア、キンジは集といのりの後を付いて行っていた。

「で、何でこんな所に連れてきた」

「会いたって言うてる人が居るから」

海の問いにいのりは簡潔に答えるだけだった。

「「「・・・・・・・・」」」

その後は会話もなく沈黙が続いた。

「ねえ、何か話さない？」

そんな空気に耐えきれずに集は全員に聞いた。

「話す事がねえだろ」

だが、海によって簡単に切り捨てられた。

「なあ、俺等ろくに自己紹介してないよな」

キンジの言葉で全員思った。確かに顔は知っているが名前はわから

ない、と。実際は海と集、いのりはお互いに名前を知っているがキングジとアリアは知らない事に気が付いた。

「じゃ俺からだな。俺は赤旗海、海賊だ」

「僕は桜満集、でこっちはユズリハいのり」

「俺は遠山キンジ」

「あたしは神崎・H・アリア」

集は自己紹介を終えた所で何か違和感を感じた。

「いのり、ふゆーねるは？」

「家だよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まるで集は時が止まったように止まった。

（忘れてた・・・・・・・・）

集は完全にふゆーねるを忘れていた。

(ごめん、ふゆーねる)

集は心の中でふゆーねるに謝罪した。

「と言うよりよ、誰が会うんだよ」
「その内に……………」

海は首を傾げて黙って付いて行き三人も黙って付いて行っていた。

「あの金髪の人、どこだろう?」

明久達は道に迷い今、自分達がどこにいるかわからなかった。

「「「はあ」」」

全員が深い溜め息を吐いた。

「探しているのは俺か？」

「「「んっ？」」」

明久達が振り返るとそこには呆れ顔の涯がいた。

「「「・・・こんにちわ」」」

「不法侵入だぞ」

明久達は顔を引きつらさせた。

海達はいのりに連れられるまま一つの扉の前にいた。

「ここか………」

海は集といのりに何も聞かずに扉を開けると下に行く階段があった。

「ここ降りればいいんだな」

「って、降りてってるし!？」

海は既に階段を下りていて集達は海を追いかけた。

「さて、どう言う奴か、楽しみだ」

「何か、色々豪快ね」

「確かに、そうだな」

暫く海達は階段を降りていると扉が見え海が開けようとするが閉まっていた。

「んっ？ 開かねえな」

そう言っ取り出したのはゴーカイサーベルとゴーカイガンだった。

「「何取り出してるの（んだ）！？」」

集とキンジが一斉にツッコミを入れた。

「いや、扉開けんのにな」

「開けるじゃなくて壊すでしょ！！」

「何で開かないだけで壊そうとするんだよ！？」

いのりは無言で扉の横に付いていた機械に番号を入れると鍵が開く音がした。

「「んっ？」」

「ふう、助かったよ、いのり」

「・・・・・・うん／＼」

海、キンジ、アリアは扉を見て、集はいのりに微笑みながら礼を言い、それを見たいのりは若干顔を赤くした。

「入るか！」

「「はあ」」

海が扉を開けると集とキンジは同時に溜め息を吐いた。

「邪魔するぜ」

「もうしてるじゃない」

「連れてきた」

三人が入ると集とキンジも慌てて部屋に入った。

「あつ、戻ってきたんだ」

「涯はまだ戻ってきてないぞ」

部屋にいたのは車椅子に乗った少女と髪の真ん中が金色の青年がいた。

「涯、まだ戻ってないんだ」

「まつ、待ってればくるだろ」

「綾ねえ、アルゴ。涯、知らない？」

「あつ、ツグミ。涯はまだ戻ってないわよ」

そこにツグミが入ってきて車椅子の少女、篠宮綾瀬と青年、アルゴに聞くが綾瀬はまだ戻っていない事を伝えた。

「で、お前等は何だ？」

「私は篠宮綾瀬、で猫耳付けてるのがツグミで、髪の実ん中が金色

で不良そうなのがアルゴ」

「俺の説明、何か酷いような」

綾瀬の説明にアルゴは少なからずショックを受けた。

「で、俺は呼んだのは何の用だ？」

「呼んだ本人に聞いてくれ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それを聞いた海は話からして今は居ない涯が自分呼んだ事が分かった。

「戻ったぞ」

「あつ、涯、おかえ・・・・・・・・り・・・・・・・・」

綾瀬が真っ先に反応したが涯の後ろを見て絶句した。なぜなら涯の後ろでは苦笑いしている明久達が居たからだ。

「どうなってんだ？　これは」

海は頭に疑問符を浮かべた。

「で、どうなってんの？　これ」

「こいつ等が後を付けてきて捕まえた」

「うん、説明ありがとう」

「つか、用件言え」

集が明久達が居る理由を聞いて涯は簡潔に済ませると集は頷き、海は改めて用件を聞いた。

「その前に自己紹介だな。俺はツツガミ涯。海賊、お前の名前は？」
「赤旗海だ。よろしくな」

海は体の向きを変え明久達を見た。

「お前等の名前も教えろ」

「何で？」

「良いから答えろ」

海は笑みを浮かべると明久達はお互いに顔を見合わせた。

「僕は吉井明久」

「俺は坂本雄二だ」

「………土屋康太」

「通称だろ？ こいつはムッツリーニ」

「………違う。本名だ」

「ワシは木下秀吉じゃ」

「うちは島田美波」

「私は姫路瑞希です」

一通り自己紹介を終えると涯が切り出した。

「取り合えず、海、お前の力について教えろ」

「はぁ・・・・・・・・・・」

涯に言われ海は取り合えずモバイルーツとゴーカイジャーのレンジャーキーを取り出した。

「これだよ」

「フィギアと携帯か」

涯が呆れて見ていたが海はレンジャーキーとモバイルーツを構えた。

「豪快チェンジー!!」

【ゴーカイジャー!】

そのまま海はゴーカイレッドに変身すると涯や始めてみた綾瀬、ツグミ、アルゴは啞然としていた。

「まっ、他にもあるぜ」

そう言つてゴーカイバツクルから侍戦隊シンケンジャーのシンケンレッドのレンジャーキーを取り出した。

「それは侍戦隊シンケンジャーのシンケンレッドか」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

秀吉がシンケンジャーの名前を言うと周りが静まり返った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何で知ってるの？ 秀吉」

そんな中で明久が秀吉に聞いた。

「知らんのか？ 侍戦隊シンケンジャーは三途の川から迫り来る外道衆と戦う戦隊でメンバーが殿と家臣の関係にあり、代々受け継がれてきた戦隊じゃ」

「そつちを聞いてる訳じゃねえだろ」

流石にここまで知っていると殆ど言葉が出なかった。

「秀吉、お前って、オタクなのか？」

「オタクではない。ファンじゃ」

「その域を越えてる気がするが」

雄二が言つと秀吉は否定したが海は苦笑いしながら言つた。

「次は俺か」

涯はフォーゼドライバーを取り出した。

「俺のこれはフォーゼドライバー、コズミックエナジーと言つエネ
ルギーを使つて戦うんだ」

「それ、僕も使つてみた」

「ゾディアーツは倒せなかったがな」

「ゾディアーツ？」

海はゾディアーツの方が気になり名前を言つとツグミが機械を操作してモニターを出した。

「ゾディアーツって言うのは、アストロスイッチとは違うスイッチを使って人がなった怪物」

「けど、そのスイッチを切らないとゾディアーツはまた現れる」

海は頷きながらフォーゼドライバーを見るとロケットスイッチを抜いて、手に取った。

「おい！」

直ぐに涯が反応したが海はロケットスイッチを取ろうとする涯を軽く受け流した。

「こんなのでか」

暫くロケットスイッチを見た海はロケットスイッチを涯に投げ渡した。

「用が終わったなら俺は帰るぞ」

「話は終わってない」

海は足を止めて涯を見た。

「俺と協力」「断る」……………」

海は直ぐに迷いなく涯の申し出を断った。

「何故だ？」

涯は不機嫌そうな顔をして海を見るが海は動じず涯を見た。

「俺は海賊だ。自分のやりたい事をする。そう言っもんだ」

海が部屋を出ると集、いのり、キンジ、アリアが後を追った。

「・・・・・・・・」

明久はそんな中、フォーゼドライバーを手に取った。

「！？ お前・・・！」

明久は暫くフォーゼドライバーを見た後、涯を見た。

「僕には、分からない事はある。けど、何か出来るのにしないのは嫌だから、僕が戦う」

「ふざけるな、それは俺が使っ」

涯は明久からフォーゼドライバーを取ろうとするが明久は涯の手を掴んだ。

「けど、一人より大勢の方が良いでしょ？ 僕、ううん。僕等にも手伝わせてよ」

涯は明久を見た後雄二達を見ると全員、強い意志の籠もった目だった。

「ふう、仕方ない。フォーゼドライバーはお前に預けるが、言う事を聞け」

涯はロケットスイッチをフォーゼドライバーに装填した。

【ロケット！】

「ありがとう」

明久は手を差し出し涯と握手をした。

月面にある城の中では黒十字王が王座に座りながら何かを考えていると扉が開き左肩に赤いカプセルが体にある、ボウガンが入ってきた。

「ボウガン、入ります」

「何だ？ 用件を言え」

「地球に降り立ち、海賊の抹殺と地球を侵略して見せます」

「ほう、なら行け！！」

「はっ！！」

ボウガンが出ると黒十字王は笑った。

「海賊共、これで終わりだ」

黒十字王は地球を眺めながら言った。

「ちょっと待ってよ!!」

海を追いかけていた集は歩いていった海の肩を掴んだ。それをキンジ達も見ていた。

「んだよ……」

「いや、何で協力しないのかなって、思って」

「協力しねえとは言ってねえ」

「えっ……」

集は啞然とした表情で海を見ていた。

「俺は命令される気はねえが、協力しねえ訳じゃねえからな」

海は集達に笑みを見せた。

「で、スイッチ使ってる人って、誰か分かるの？」

「調べれば分かるがな、後、スイッチを使ってる奴はスイッチチャーと呼んでる」

明久の質問に涯は顎に手を当てながら答えた。

「あつ、それだけ分かるよ」

ツグミはそう言つと機械を操作してモニターを見せた。

「バガミールを涯に付けさせて、その後スイッチの行方を探らせた
ら」

モニターには頭部が蠍のようなゾディアーツが制服を着た生徒に渡している映像が流れた。

「何だ？ こいつ」

「スイッチを渡してる奴だろ」「それよりバガミールとは何じゃ？」
「フールドロイドで動くカメラって所」

雄二が蠍のようなゾディアーツについて聞くと涯は自らの考えを言い、秀吉はバガミールについて聞くとツグミは簡単に教えた。

「多分そろそろ戻ってくる筈」

ツグミが言つとどこからともなく一つの機械が来ると綾瀬がそれを持ち背中にあつたスイッチを抜くとハンバーガーのようになった。

「これがバガミール、スイッチを入れるとフードモードからロイドモードに変わるの」

「それより本題だ」

綾瀬が説明していると涯が呟き全員モニターを見た。

「こいつが誰か、だな」

「うちの生徒じゃない？ 制服同じだし」

美波がモニターのスイッチャーを指さして言った。確かにスイッチャーは天ノ川学園の青い制服を着ていた。

「……どこかで見た事が」

「あつ、この人は」

「どうしたの？ 姫路さん」

ムツツリーニが呟き姫路は何かを思い出したような顔をして、明久はそれを聞いた。

「いえ、前、学校の校庭でラグビーボールを磨いてるのを見た事があつて」

「ならラグビー部かもな、んで確かラグビー部は大会だぜ」

「ならその会場か！！」

明久達は部屋を出ると大会会場に向かった。

「ねえ、これからどうするの？」
「別に特には」

ないと言つ前に爆発音が聞こえ海達はその方向を向いた。

「予定変更だ」

海は爆発音が鳴った場所に走り出し、集達も追った。

会場では一人の男子生徒が居た。

「これさえあれば……………」

男子生徒の手にはゾディアーツスイッチが握られていた。

「ねえ、君」

「!？」

男子生徒の後ろから明久達が来ると、明久が声を掛けた。

「お前が持つてるスイッチを渡せ」
「直球だね」

涯が言っていると明久は苦笑いした。

「何だよお前等」
「それより何で会場の中にいないんだ？」

雄二が聞くと男子生徒は会場を見た。

「俺は、頑張ったのに、他の奴より、なのにレギュラー所か補欠にもならなかった！ だから俺は奴等を見返してやる!!」

男子生徒は強くゾディアーツスイッチを握った。

【ラストワン】

ゾディアーツスイッチから音声がなり見てみるとゾディアーツスイッチが充血したようになり、棘の突起が付いた。

「！？ それを押すな！ 自力で人に戻れなくなるぞ！！」

涯が男子生徒に言うが男子生徒はゾディアーツスイッチを押すと黒い煙が出るとオリオン座が現れ、それが人型になりオリオンゾディアーツが現れると、オリオンゾディアーツの体から繭に包まれた男子生徒が出てきた。

「何あれ！？」

「ラストワン状態だと精神や人格などはゾディアーツに移り、肉体は抜け殻になる」

「そんな・・・・・・・・」

明久が驚いていると涯が説明し、姫路が驚いていた。

「お前等は会場の全員を避難させる」

「分かった!!」

雄二達は避難させる為に会場に向かった。

『邪魔する気か!? お前等!!』

「ささっとしろ。止めるんだろ」

「うん。分かってるよ」

明久は腰にフォーゼドライバーを付け、涯はバガミールにアストロスイッチを入れてロイドモードにした。

「君は、僕が止める!!」

『黙れ!!』

明久はフォーゼドライバーのスイッチを右から全て入れた。

【3・・・・・・・・2・・・・・・・・1】

「変身!!」

フォーゼドライバーのカウントが終わると明久はフォーゼドライバーにレバーを入れ右手を上上げると、仮面ライダーフォーゼに変身した。

「宇宙、キターーーー!!」

フォーゼは腕を上上げオリオンゾディアーツを見た。

「行くよ!!」

オリオンゾディアーツは巨大棍棒、レムノスと大盾、キオスを構えるとフォーゼはオリオンゾディアーツを殴るがキオスで防がれた。

「あれ!？」

「そいつについて解析するから時間を稼げ!!」

「いきなり!? うわぁ!？」

涯はフォーゼに向かって言うとフォーゼは涯の方を見るがオリオンゾディアーツのレムノスで殴られた。

その頃、ボウガンはズゴーミンとゴーミンを引き連れ、肩に持ったライフルで辺りを撃っていた。

「人間共よ! 我らにひれ伏せ!!」

だが、ボウガンの隣にいたゴーミンの何体が突如倒れた。

「「「ゴー!?!」」」

「何だ!?!」

ボウガンが見た方向には海達が歩いてきていた。

「何だお前等?」

「俺は、俺達は海賊だ」

「海賊? 海賊が何のようだ」

海達はボウガン達を睨んでいた。

「たまたま近くを通つてな、気に入らねえんだよ」

「僕等は、お前達を倒す」

「そう言う訳よ」

「ああ、そうだな」

「そう言う事」

「ふざけるな! 貴様等こそ我等に刃向かってただで済むと思うな

「!!」

海達の言葉にボウガンは怒鳴るが海達はモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「『豪快チェンジ!!』」

【ゴーカイジャー!】

海達がゴーカイジャーに変身するとボウガン達は身構えた。

「ゴーカイレッド!」

「ゴーカイブルー!」

「ゴーカイエロー!」

「ゴーカイグリーン!」

「ゴーカイピンク」

「『海賊戦隊、ゴーカイジャー!!』」

ゴーカイジャー五人は名乗りを上げるとゴーカイジャーはゴーカイ

サーベルとゴーカイガンを構えるとゴーカイブルーはゴーカイピンクにゴーカイガンを渡しゴーカイピンクはゴーカイサーベルをゴーカイブルーに渡し、ゴーカイイエローはゴーカイガンをゴーカイグリーンに渡し、ゴーカイグリーンはゴーカイサーベルをゴーカイイエローに渡した。

「ド派手に行くぜ!!」

ゴーカイレッド、ゴーカイグリーン、ゴーカイピンクはゴーカイガンでゴーミンを撃つていき、ゴーカイブルーとゴーカイイエローはゴーミン達に近付きゴーカイサーベルでゴーミンを切ると、ゴーカイレッドも近付きゴーミンをゴーカイサーベルで切った。

「行くぜ!!」

ゴーカイレッドは荒々しくゴーカイサーベルを振り、遠くのゴーミンはゴーカイガンで撃ち抜いていく。

「はっ!!」

ゴークイブルーは二本のゴークイサーベルでゴーマンを次々と切つていきゴーマンが撃ったバズーカの弾を切り近付いてきたゴーマンを切った。

「行くわよ!!」

ゴークイイエローはゴークイサーベルの一本をゴーマンに刺し、後ろからゴーマンを切りゴークイサーベルを抜いた。

「どんどん行くぜ!!」

ゴークイグリーンはゴークイガンで次々とゴーマンを撃ち抜き、ゴーマンが振り下ろした棍棒を避けるとゴーマンを蹴り、更にゴークイガンで撃つ。

「……………行くよ」

ゴーカイピンクはゴーカイガンで近付いてくるゴーミンをどんどん撃っていく。

「ゴー！！」

「！？」

ゴーミンが後ろからゴーカイピンクに向かって棍棒を振り下ろそうとし、ゴーカイピンクはゴーカイガンで撃とうとするが間に合わず目を瞑るが、

「ゴー！？」

ゴーミンの悲鳴と何も来ない事に違和感を感じ目を開けるとゴーカイブルーの背中が見えた。

「大丈夫？ いのり」

「うん……………ありがとう、集／／／」

ゴーカイブルーはゴーミンを切りながら聞き、ゴーカイピンクはそんなゴーカイブルーを見てマスクの下で顔を赤くしていた。

「平気か？ アリア」

「そっちこそ！」

ゴーカイグリーンとゴーカイイエローは背中合わせになるとお互いに声を掛け、ゴーカイグリーンはジャンプすると回転しながらゴーカイガンを撃ち、ゴーカイイエローはゴーカイサーベルを投げるとゴーカイサーベルに付けていたワイヤーでゴーカイサーベルを振り回し、ゴーミン達を切っていく。

「大体片付いたか」

ゴーカイジャーの五人に集まるとズゴーミン三体もゴーカイジャーの前に現れた。

「ズゴッ！」「」

ズゴーミンはレーザーを撃つがゴーカイジャーは避けるとゴーカイレッド、ゴーカイブルー、ゴーカイイエローがゴーカイサーベルでズゴーミンを切り、更に前後からゴーカイレッド、ゴーカイグリーン、ゴーカイピンクがズゴーミンをゴーカイガンで撃った。

「とどめだー!!」

ゴーカイジャー五人が並ぶと五人はゴーカイサーベルとゴーカイガンのゴーカイシリンドラーを立て、二本のレンジャーキーをセットした。

【フアッイナルウェッイブ!】

「ハアアアアア……………」

ゴーカイジャーはそれぞれ力を溜めていた。

「ハッ！！」

ゴークアイグリーンとゴークアイピンクはゴークアイガンでズゴーマンの
一体を撃ち抜き。

「ハア！！」

「ヤア！！」

ゴークアイブルーとゴークアイイエローはゴークアイサーベルでズゴーマ
ンを切り。

「オリヤ！！」

ゴークアイレッドはゴークアイガンを撃った後、ゴークアイサーベルから
斬撃を飛ばしズゴーマンに命中した。

「ズッ、ズゴー！？」

ズゴーミン三体が爆発するとボウガンがゴークイジャーの前に来た。

「言うておくが、俺はズゴーミンのようには行かないぞ」

「そうか、よっ！！」

「ぐわあ！？」

ゴークイレッドがボウガンに向かってゴークイサーベルを投げボウガンに当たるとゴークイブルー、ゴークイイエローがボウガンをゴークイサーベルで切り、ゴークイグリーン、ゴークイピンクがゴークイガンでボウガンを撃ち、ゴークイレッドはボウガンに跳び蹴りを喰らわせた。

「うわあ！？」

ボウガンが倒れるとゴークイジャーは並んだ。

「オールレッドで行くぞ」

ゴーカイジャーはゴーカイバツクルを開きレンジャーキーをモバイルーツに入れた。

「『豪快チェンジ！』」

【ライプマン！】

【ギンガマン！】

【メガレンジャー！】

【ゴーゴファイブ！】

【ダイレンジャー！】

ゴーカイレッドは超獣戦隊ライブマンのレッドファルコン、ゴーカイブルーは星獣戦隊ギンガマンのギンガレッド、ゴーカイイエローは電磁戦隊メガレンジャーのメガレッド、ゴーカイグリーンは救急戦隊ゴーゴファイブのゴーレッド、ゴーカイピンクは五星戦隊ダイレンジャーのリュウレンジャーに豪快チェンジした。

「あら？ 赤ばっかり」

ボウガンは起き上がりレッドファルコン達を見て呟いた。

「メガショット！　メガブラスター！」

「ファイブレイザー！　ゴープラスター！」

メガレッドはメガショットとメガブラスターを持ち、ゴーレッドはファイブレイザーとゴープラスターを持ちボウガンを撃った。

「うわぁ！？」

次にギンガレッドとリュウレンジャーが前に出た。

「炎のたてがみー！」

「天火星・・・！　稲妻炎上波・・・！」

「あっちちちいー！？」

ボウガンはギンガレッドとリュウレンジャーが放った炎を受け倒れるとレッドファルコンが剣型の武器、ファルコンセイバーを持ちボウガンに近付いた。

「なっ!？」

「ファルコンブレイク!!」

レッドファルコンはファルコンセイバーに力を溜め切る、ファルコンブレイクをボウガンに放った。

「ぐわあああああああっ!？」

レッドファルコン達がゴージャスに帰ると同時にボウガンは爆発した。

その頃、フォーゼとオリオンゾディアーツの戦闘はオリオンゾディアーツはレムノスで殴られ攻撃してもキオスで防がれていた。

「くっそ……………」

「明久!!」

涯の声が聞こえフォーゼはその方向を見た。

「ナンバー8だ! 使え!!」

涯はフォーゼに×の8と書かれたスイッチを投げフォーゼは受け取るとランチャースイッチと入れ替えた。

【チェンソー!】

フォーゼはチェンソースイッチを装填するとスイッチを入れた。

【チェンソー・オン！】

フォーゼの右足にチェンソーモジュールが現れるとフォーゼはオリオンゾディアーツに向かって回し蹴りを入れた。

【ぐうう………！！？】

「効いてる」

フォーゼは効いている事を確認すると次々と回し蹴りを決めていく。

「ツグミ、どうだ！？」

『オリオンゾディアーツの体内にエネルギーが溜まって、ここで決めたら被害が出る！！』

「分かった。明久！！」

「何！？」

フォーゼはチェンソースイッチを切ると涯の方を見た。

「ここで決めたら被害が出るー!!」
「えっ!?! どうするの!?!」

涯の言葉にフォーゼは驚き、聞いた。

「宇宙^{そふ}で決めろ」
「えっ?」
「ツグミ!」
『アイ!!』

ツグミは機械を操作した。

【パワーダイザー】

フォーゼの元に四輪のパワーダイザーと白いシャトルのようなバイク、マシンマッシグラーが来た。

「マッシグラーに乗れ!!」

「どっち!？」

「バイクの方だ!!」

フォーゼがマシンマッシグラーに乗るとパワーダイザーの形が変わりマシンマッシグラーをパワーダイザーに乗せた。

「ツグミ!!」

『分かってる!!』

パワーダイザーからミサイルが放たれオリオンゾディアーツに当たるとオリオンゾディアーツは宙に上がった。

【タワーモード】

マシンマッシグラーを乗せている部分が垂直に上がった。

「うおお!？」

【3・・・・・・・・2・・・・・・・・1・・・・・・・・ブラスト・オフ】

フォーゼは興奮し、パワーダイザーのカウントが終わるとマシンマッシグラの後ろからジェット噴射され、空中に上がりオリオンゾディアーツに体当たりしてどんどん高度が上がっていった。

「宇宙、イクーーーーー!!」

「・・・・・・・・何言ってた？ あいつ」

フォーゼが叫ぶと涯は首を傾げた。

その頃、月面の城では、

「海賊よ。これで終わりではないぞ」

黒十字王は手から黒いオーラを地球に向けて放った。

ゴークイジャーは変身を解こうとするがボウガンが倒された場所に黒いオーラが当たった。

「何だ？」

全員警戒すると、黒いオーラは人型になっていき、巨大な姿のボウガンに変わった。

「嘘お！？」

「巨大化しやがった」

「どうするんだよ！？」

ゴーカイレッドはモバイレーツを出し、ボタンを押した。

【ゴーカイガレオン！】

ゴーカイガレオンが来るとロープが降り、全員ロープに捕まりゴーカイガレオンに入った。

「で、どうするの？」

「お前等の初操縦だから、宇宙に行くぞ」

ゴーカイガレオンはボウガンに体当たりし、宇宙に向かった。

フォーゼは大気圏を抜けるとマシンマッシグラーから飛んだ。

「行くよ!!」

【ロケット・オン ドリル・オン】

フォーゼはロケットモジュールとドリルモジュールを装備した。

「とどめだあああ!!」

フォーゼはレバーを引いた。

【ロケットノドリルノリミットブレイク】

「ロケットドリル宇宙キーーーーック!」

フォーゼはオリオンゾディアーツに向かって蹴りを放ちロケットモジュールで加速し、ドリルモジュールがオリオンゾディアーツを貫いた。

「やった!」

フォーゼはロケットモジュールとドリルモジュールを解除すると飛んできたゾディアーツスイッチを切るとゾディアーツスイッチが消滅した。

「ふう。うわぁ!」

フォーゼは地球の引力に引かれ落下していった。

ゴークアイガレオンはボウガンを月面に放った。

「ぐわあ!?!」

ボウガンは月面を転がるとゴークアイガレオンから黄色いトレーラーのような、ゴークイトレーラー。そしてゴークイトレーラーからピンクの潜水艦のような、ゴークイマリン。ゴークイマリンから緑のレースカーのような、ゴークイレサー。ゴークイレサーから青いジェット機のような、ゴークイジェットが出てきた。

「凄い……………」

ゴークイジェットに乗っているゴークイブルーは啞然とし、ゴークアイエロー、ゴークイグリーン、ゴークイピンクも同じだった。

「行くぜ！ ガレオンキャノン！！」

ゴーカイガレオンの側面から大砲が放たれボウガンに当たり、ゴーカイジェットとゴーカイレーサー、ゴーカイトレーラー、ゴーカイマリンがビーム砲を放つ。

「次行くぞ」

「何するんだ？」

「こつするんだよ。海賊合体！！」

ゴーカイレッドが叫ぶとゴーカイマシーンが一斉に動き出す。

「うわぁ！？」

「何！？」

「どうなるんだ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

四人は戸惑いを隠せないがゴーカイガレオンにゴーカイジェットが

右、ゴーカイレーサーが左に腕のように付き、ゴーカイガレオンの船首が開き顔が出ると、ゴーカイトレーラーが左、ゴーカイマリンが右に足のように付いた。

「行くぜ」

ゴーカイガレオンのコックピットに四人が操縦桿事出てきた。

「何これ？」

「良いから言え!!」

「『完成、ゴーカイオー!!』」

そして月面に豪快な王が降り立った。

「くっそあ!!」

ボウガンは殴りかかるがゴーカイオーは腰に付けているゴーカイケンをもちボウガンを切った。

「悪いが一気に決める!!」

ゴークイレッドがレンジャーキーを取り出すと四人もレンジャーキーを取り出した。

「行くぜ!!」

「レンジャーキー、セット!!」

全員がレンジャーキーをゴークイダリンにセットし回すとゴークイオーの背中のダイヤルが回った。

「ゴークイ、スターバースト!!」

ゴークイオーの胸のハッチから大砲、ゴークイホウが出ると、続いてジェット、レーザー、トレーラー、マリンのハッチが開くと大砲の弾が見えた。

「うつ、うわあああああああああああああああ！！！」

ボウガンはゴーカイオーに突っ込むがその前にゴーカイホウが何度も撃ち込まれていった。

「ぐわあああああああつ！！！」

ボウガンが爆発するとゴーカイオーは合体を解除し、ゴーカイマシンがゴーカイガレオンに入ると、ゴーカイガレオンは地球に向かった。

「うわあああああああつ！！！！？」

フォーゼは地上に向かって落ちていた。

「何かないの!？」

フォーゼは懷から7の□のスイッチを取り出しレーダースイッチを入れ替えた。

【パラシュート!】

フォーゼはパラシュートスイッチを入れるとスイッチを入れた。

【パラシュート・オン】

フォーゼの左腕にパラシュートモジュールが現れるとパラシュートが開きゆっくり落ちていった。

ゴーカイジャーはゴーカイガレオンから涯達を探し見つけると地上に降り立った。

「涯!!」

「集か」

「どうなってんだ？」

ゴーカイレッドは雄二達に囲まれてる糸が付いている男子生徒を見ていると、

「おい!!」

上空からフォーゼが降りてきてフォーゼも地面に降りた。

「仮面、ライダー」

「はっ？」

変身を解いた海が呟きキンジが首を傾げた。

「いや、何か……何となく」

「仮面ライダー、か。それもいいね。今日から仮面ライダーフォーゼ！！ で行くよ」

一連の事件は終わりを告げた。

「ふう、昨日は疲れたな」

翌日、集は学校で昨日の事を思い出していた。

（色々あったけど、何とかなるよね）

チャイムが鳴り生徒が席に着き女性教師、園田紗理奈が入ってきた。

「今日は皆さんに転校生を紹介します！」
（転校生？ この時期に）

集も何となく考えていた。

「それじゃ、入ってきて」

次の瞬間、集の表情が変わった。

「嘘………」

「赤旗海だ！ よろしくな」

入ってきたのは海だった。

「そんな、嘘でしょ」

集は頭を抱えた。

第3話 宇・宙・激・闘（後書き）

黒十字王が気付かれなかった理由は月の裏側にいたからです。

次回はクリスマス関係かな。クリスマス過ぎるかもしれないけど。

第4話 クリスマスの出会い（前書き）

クリスマスに投稿できたけどムツチャグダグダだし最後投げやりみたいな感じだし、それでも楽しんでくれたら幸いです。

本編をどうぞ。

第4話 クリスマスの出会い

海が転校して数日経った頃。

「クリスマスパーティー？」

「学園の行事であって、学園の校庭に出店とか出して楽しむんだ」
「面白そうじゃねえか、なあ」

海が学園に入った理由は入った日に遡る。

「なあなあ、どこから転校してきたんだ？」

そう海に聞いてきたのは集のクラスメートの少年、
魂館^{たまだて}颯^{そうつた}太^ただった。

「ふっ、秘密だ」

「何だよそれ!？」

「あんまり詰め寄るなよ、困ってるだろ」

そう言っさむかわやひろて颯太を止めたのは寒川谷尋やひろと言う男子生徒だった。

「ちょっとごめん、こっち来て」

そんな状況で集は海の制服の襟を掴んだ。

「おい!？」

「集、もうすぐで授業だぜ」

「すぐに戻るから」

「けどよ……」

「すぐに戻るから、いい加減にしてよ」

「……………」

集は笑顔だったが颯太と谷尋は黙った。でなければ命がないと直感したからだ。

「すぐに戻るね」

「おい！ しゝぐえ！？ 首！ 首絞まつてる！！」

集は海の制服の襟を掴んでいたため必然的に海の首が絞まった。

「何か、いつもの集じゃないような」

「うん……………」

それを見ていた二人の女子生徒、めんじょぼれ校条祭と草間くさま花音かのんは集を見てある意味、変わったと思った。

「……………」

いのりはその様子を見て席を立ち二人を追った。

「いきなり何だよ」

「それこっちの台詞なんだけど」

集は海を屋上に連れてくると向き合った。

「何でいきなり転校してきたの？」

集は海に直球で聞いた。

「昨日の夜に涯から電話があって『天ノ川学園高校に入れ』って言われた。それだけだ」

「成る程、てか何で僕のクラスなの？」
「知るか」

海は屋上に寝そべった。

「もうすぐ授業だよ」

「別に良いじゃねえか、こんなに気持ち良いんだよ」
「はあ……」

集が溜め息を吐くと扉が開く音が聞こえ見てみると、いのりが入ってきた。

「いのり……」

「んっ……」

「うわぁ!？」

いのりが集に近付き腕に抱きつくと全体重を掛け集と共に屋上に寝そべった。

「どうしたの？ いのり」

「寝よ……」

「ええー!？ ちょっと、いのり!？」

集が驚いていると二人の寝息が聞こえた。

「あれ？ 二人共！？ ねえ！！」

集は困惑しながら二人は見た。

（思い出していると涙と涯への怒りが込み上げてくるなあ）

「集、涙流してどうしたの？」

「何でもないよ」

涙を流した集を祭は不思議な顔で見っていた。

「さて、パーティーは何すんだ？」

「そうだな。どうするか」

「颯太に海、張り切ってるな」

海に颯太は張り切り切りそれを見た谷尋は苦笑いしていた。

「楽しそう」

「うん。盛り上がる時期でもあるし」

いのりは三人を見て呟き集は頷いて答えた。

「でよ、パーティーには学園の生徒だけか？」

「いや、一般の人もあるようにするんだ」

「成る程な、当日が楽しみだ」

海は笑みを浮かべてクリスマスを待った。

クリスマスパーティー当日、学園には多くの人が訪れていた。

「おお、集まってるな」

「それもそうだろ」

「今日を楽しみにしている人も居るし」

海は手に持つてるローストチキンを食べながら言い、キンジはそんな海を横目で見ながら言い、明久も苦笑いしていた。

「それキンちゃん、どっか回ろう」

「キンジは私の奴隷^{パートナー}何だから、私とよ」

「なあ、ゆっくりさせろよ」

「人気者だね。キー君」

「全くだな」

「ええ、そうですね」

白雪とアリアはキンジの腕を掴み、キンジは溜め息を吐き、理子は

笑いながら言い、銀髪の少女、ジャンヌ・ダルクと緑髪の少女、レキが同意した。

「明久君・・・・・・・・」

「アキ・・・・・・・・」

「私と回りますよね（回るわよね）？」

「ちよっ！？ 引つ張らないで、誰か助けてえーーーーー！！」

瑞希と美波に引つ張られていく明久にムツツリーニと秀吉は手を振るだけだった。

「「集・・・・・・・・」」

「何？ 二人とm、って何で腕掴んでるの！？ ちよっと、無言で引つ張らないでよーーーーー！！」

「「アーメン」」

いのりと祭に引つ張られていく集に谷尋と花音は祈りを捧げた。

「どうして、集、何だ」

颯太は涙を流しながら地面を殴っていた。颯太自身いのりに好意を持っていた。

「何だろうな、あれ」

「世に言うジェラシーだろ」

「その前に平気か？」

「そう見えるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・見えねえな」

海は颯太を冷ややかな目で見て雄二はそれに答えたが、雄二は目隠しをされ体を縄で縛られていた。

「雄二、こっち」

「おい！？ 翔子、引き摺るり、ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！？」

黒髪の少女、霧島翔子に雄二は引き摺られ叫び声を上げた。

「・・・・・・・・・・見て回るか」

そんな混沌化した場所から海は離れていった。

海はローストチキンを食べながらパーティーを楽しんでいた。

「結構、面白いな・・・・・・・・あっ」

そこで海は杏子を見かけ近付いた。

「よお、赤いの」

「んっ、あっ、あんた確か・・・・・・・・・・誰だっけ？」

海は杏子に声を掛けたが杏子は海の事を忘れていて、海は思いつ切りずっこけた。

「赤旗海だ。一度会ってるだろ」

「どこだよ」

「林檎・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、思い出した」

林檎と言う単語で杏子は海の事を思い出した。

「ここにはただ飯食いにか？」

「後は会う奴等が居る」

「マジか!？」

杏子の言葉に海は驚いた。

「何驚いてんだよ？」

「会う奴居んのか」

「あたしに会う奴居ておかしいか？」

海が呟くと杏子は握り拳を作っていた。

「いや、意外だったからな」

さり気なく海は酷い事を呟いた。

「お前なあ」

「まっ、楽しんでけ」

「あっ、待て！ 逃げんな！！」

杏子が本気で殴る前に海は杏子の肩を叩きその場を離れ杏子はそれを追い掛けた。

「燃え尽きたよ。真っ白な灰に」

集は某ボクサーの台詞を呟きながら真っ白になっていた。

「集は私と回るから」

「ユズリハさん、これは譲れないんで」

当の本人達はバチバチ火花を散らしていた。

「二人共、どうしたの？」

集は精気のない目で二人を見ていた。

「別に……………」

二人は無表情だったが集は特に気にしなかった。

「もしかして、まだ回るの？」

「うん……」

「そうなんだ」

集の顔は全てを諦めていた。

「お前等まだ回るのか？」

「当然よ（だよ）！！」

「はあ、たく」

キンジの問いにアリアと白雪は同時に答えるとキンジは溜め息を吐いた。

「いつまで続くのやら」

先に行く二人をキンジは頭を抱えながら追い掛けた。

明久達と雄二達は合流したが明久は疲れ果てた顔をして、雄二は目がある意味死んでいた。

「雄二、行くよ」

「もう、やめてくれ」

雄二の頼みも聞かず翔子は雄二を引つ張って行った。

（雄二、生きてまた会おう）

明久は心の中で雄二に敬礼した。

「明久君、次はあちらに！！」

「あつちよ！！」

「引つ張らないで！ 体が千切れるから！！」

明久は瑞希と美波に両側から引つ張られていた。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！？」

学園に明久の悲鳴が木霊した。

「むっ、明久の悲鳴か」

秀吉は明久の悲鳴を聞いて足を止めた。

「明久、お主の事は忘れん」

秀吉は現実逃避気味に行った。

「……それは現実逃避」

「すまんがこうするしかないのじゃ」

ムツツリーニが指摘すると秀吉は目を反らした。

「あの悲鳴は、明久か」

逃げていた海は明久の悲鳴を聞くと足を止めた。

「あいつ、生きてんのか？」

海は少々気になったが気にしない事にした。

「んっ？」

海は影が差し上を見上げると帽子が飛んでいて、海はジャンプして帽子を取った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・誰のだ？」

海は帽子を見るが持ち主に繋がる物はなかった。

「探すか？」

「あつ、それ私の！！」

海は声が聞こえ振り返ると綾瀬と綾瀬の車椅子を押してるツグミが目に入った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ？」

海は思考が一回停止し、綾瀬とツグミはこんな所で会つとは思わず啞然としていた。

「ほら、帽子」

「あつ、ありがとう」

三人はそのまま黙り気まずい空気が流れた。

「見つけたぁー!!」

突然叫び声が聞こえ振り返ると杏子が全力で走っていた。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、ぜえ」

「大丈夫か？」

「お前なあ!!」

杏子は海の顔面に向かって拳を当てようとするが海はその拳を止めた。

「良いパンチだな」

「そうか、って褒めてんなよ!!」

「褒められんのやなのか？」

「そう言う訳じゃねえよ!!」

「えっと、誰？」

「もしかして、恋人？」

「俺はロリコンじゃねえ」

海と杏子のやり取りを見て綾瀬が聞くとツグミは笑みを浮かべていったが海がそれを否定した。

「あたしは佐倉杏子、よろしくな」

「私は篠宮綾瀬、よろしくね」

「あたしはツグミ、よろしく」

杏子、綾瀬、ツグミはお互いに自己紹介した。

「で、会う奴が居んだろ」

「それがさあ、どこ居るかわかんねえんだよ」

それを聞いた海は呆れていた。

「………迷子か」

「ちげえ、絶対にちげえ」

海が指摘すると杏子は目を反らした。

「迷子、だな」

「迷子、ね」

「迷子以外無いと思うけど」

杏子は三人から言われ落ち込んだ。

「あつ、やつと見つけた!!」

「んっ? あつ! さやか……ぶっ!?!」

突然、青髪の少女、美樹さやか杏子に近付くと杏子が名前を言う前に顔面にドロップキックを喰らった。

「あんた今までどこにいたの!? 探すの大変だったんだけど!!」

「いつてえな! いきなり蹴る事ないだろ!!」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

いきなり喧嘩を始めた二人を海達は啞然とするしかなかった。

「あゝ、見なかった方向で」

「アイ・・・・」

「世の中には知らない方が良い事も、あるからね」

三人は頷きながら杏子とさやかとの喧嘩を見ていた。

「なあ、気になったんだけどよ。葬儀社って何すんだ？」

海は気になっていた事を綾瀬とツグミに聞いてみた。

「葬儀社って言うけど、何でも屋だから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はっ？」

「もう一回言おうか？ 何でも屋」

海は二人の答えに哑然としていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・その社長は厨二か」

「社長、涯だから」

「17歳で葬儀社の社長」

「成る程、涯は厨二か」

海は苦笑いしてしまった。

「つくしゅー!!」

「涯、風邪ですか？」

くしゃみをした涯に声を掛ける男性、四分儀を涯は見ると首を振った。

「きつとただの噂話だ」
「そうですか」

涯は特に気にする様子はなく四分儀も気にはしなかった。

海達は未だに喧嘩している杏子とさやかを冷ややかに見ていた。

「さやかちゃん！！ 杏子ちゃん！！」
「あつ、まどか！！」

そんな二人に近付いてくるピンク色の髪の少女、鹿目まどかにさやかは手を振った。

「さやかちゃんと杏子ちゃんここにいたんだ。探したよ」

「ごめんごめん、杏子はうるちよろするから」

「さやかがあたしの顔面蹴ったのが原因だろ！！」

「あんたがうちよろするからでしょ!!」

また喧嘩を始めたさやかと杏子にまどかはおろおろしていた。

「はあ、たく」

「んっ？」

海はさやかと杏子の元に歩いていき、綾瀬とツグミが不思議思っていると、

「いい加減にしろ」

「ぎゅあ！？」

「えええええええええええええええええつ!？」

海はさやかと杏子の頭に思いつ切り拳骨をし、さやかと杏子は目から星と涙を出し、綾瀬、ツグミ、まどかは驚いていた。

「遠慮って言葉知らない？」

「男女平等だ」

綾瀬が顔を引きつらせながら言うが海は簡単に返した。

「いつてえ！」

「頭が割れる」

さやかと杏子はまだ頭を押さえていた。

「どうせ何にも入ってないだろ」

「「ひどっ（ひでえ）！！」「」」

海の言葉にさやかと杏子は涙を流した。

「鬼っ！！」

「悪魔っ！！」

「ちげえ、海賊だ」

「それも違う！！」

非難の言葉を海に浴びせるさやかと杏子だったが海は全く動じなかったが違う事を言い、綾瀬とツグミがツツコミを入れた。

「二人共、もう行こう。マミさんやほむらちゃんも待ってるし」

「そうだ。杏子のせいで忘れてた」

「あたしのせいにすんなよ！！」

「良いから行こう」

まどかは喧嘩しているさやかと杏子を引っ張ってどこかに行った。

「ある意味凄い奴だな」

海はさやかと杏子を引っ張って行ったまどかを見て啞然としていた。

楽しくクリスマスパーティーが賑わっているが異変は突如やってきた。学園のガラスや鏡が段々波打ってきた。

「「「!?!?!」」」

さやかと杏子、そして金髪の少女、巳マミの耳にガラスを引っ掻く音が聞こえた。

「さやかちゃん？ 杏子ちゃんもマミさんもどうしたんですか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

険しい表情をした三人にまどかは何かあったのか聞き、黒髪のストリートの少女、暁美ほむらは黙って三人を見ていた。

「あいつ等、こんな時に来やがった」
「あいつ等？」

「ミラーモンスター……」

「不味い状況ね、ここには大勢の人が居るから私達だけじゃ態様出
来ないわ」

険しい表情をした杏子にまどかが聞くとさやかは辺りを見渡しなが
ら答えマミは苦い表情をした。

波打っていたガラスや鏡からヤゴ型のモンスター、シアゴーストと
トンボ型のモンスター、レイドラグーンが大量に飛び出してきた。
それにより学園に居る人達はパニックを起こした。

「何こいつ等!？」

「知らねえよ!!」

海は迫ってくるシアゴーストとレイドラグーンをゴークアイサーベル
とゴークアイガンで攻撃していく。

「何なんだよ、一体!!」

海は更にレイドラグーンを蹴ると後ろから迫ってきたシアゴーストにゴーカイサーベルを刺した。

「くっ!?!」

集は近付いてきたレイドラグーンをゴーカイサーベルで切ると更にシアゴーストを切った。

「ねえ集! 何これ!?!」

「祭、正直僕が聞きたい!!」

「集、前!!」

「!？」

祭が聞くと集はシアゴーストを切りながら言い、空に飛んでいたレイドラグーンをゴークアイガンで撃つてたいのりは集に向かって叫ぶと振り返ってレイドラグーンをゴークアイサーベルで切った。

「いのり、祭連れて先に逃げて!!」

「集は？」

「後で追い掛けるから! 早く!!」

「.....わかった」

「えっ? ユズリハさん!？」

集はシアゴーストとレイドラグーンを切りながら言い、いのりは暫く悩んだ後祭の手を引いてその場を離れた。

「ここから先には、一步も通さない!!」

集はゴークアイサーベルを上 to 投げるとモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジー！」

【ゴーカイジャー！】

集はゴーカイブルーになると落ちてきたゴーカイサーベルを握った。

「派手に行くよ」

ゴーカイブルーはゴーカイサーベルを握りシアゴーストとレイドラ
グーンの群に突っ込んだ。

「ちっ！？ キリがない」

キンジはゴーカイガンでシアゴーストとレイドラグーンを一体ずつ撃っていた。

「キンジ、どうすんのよ!？」
「キンちゃん!！」

アリアはキンジから借りたゴーカイサーベルと自分のゴーカイサーベルを持ち二刀流でシアゴーストを切り、白雪は日本刀、色金殺女イロカネアヤメを使いシアゴーストを切っていく。

「キー君がヒステリアモード使えば？」
「それぞれもそうだがって、理子お前何時のにいたんだよ!？」

キンジは何時の間にか近くにいた理子に驚いていた。

「けど、そんな暇ないかもな」

キンジはゴーカイガンでレイドラグリーンを撃ちながら言った。鏡やガラスからはシアゴーストとレイドラグリーンが次々と出てきてシアゴーストの何体かは脱皮してレイドラグリーンになっていた。

「仕方ねえ、俺が食い止めるから、避難誘導頼む」
「キンジ、あんた何言ってるの!？」

キンジはシアゴーストを蹴り飛ばしながら言い、アリアはその言葉に驚いた。白雪や理子も口には出さなかったが驚いた表情をしていた。

「仲間を信じ、仲間を助けよ。だから、俺を信じろ」

キンジはゴーカイガンを上には投げモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジー!」

【ゴーカイジャー！】

キンジはゴーカイグリーンになると上から落ちてきたゴーカイガン
を手に取りシアゴーストとレイドラグリーンを撃ち抜いた。

「ゴーカイグリーン！」

「キンちゃん？」

「どうなってるの？」

白雪と理子はキンジがゴーカイグリーンになった事に戸惑っていた。

「早く行け、ここは俺が食い止める」

「キンジ！ これー！」

「おっと」

ゴーカイグリーンはアリアが投げたゴーカイサーベルに手に取った。

「よしつ、行くか」

「キンちゃん、無事でいてね」

「わかつてる」

「キー君、頑張つてね」

「ああ、大丈夫だ」

「負けんじゃないわよ。キンジ」

「早く行け」

アリア、白雪、理子はその場を離れ追おうとしたレイドラグーンの背中をゴーカイガンで撃ち、近付いてきたシアゴーストをゴーカイサーベルで切った。

「ここから先は行かせねえ」

ゴーカイグリーンはゴーカイサーベルとゴーカイガンを強く握った。

明久はシアゴーストとレイドラグーンの攻撃を受け流しながらフォーゼドライバーを腰に付けた。

「姫路さん！ 美波！ 下がってて！！」

明久の声に瑞希と美波は後ろに下がり、明久はフォーゼドライバーのスイッチを下ろしていく。

【3・・・2・・・1】

「変身！！」

レバーを入れて明久はフォーゼに変身した。

「宇宙、キターーーーー！！ 仮面ライダーフォーゼ！！ 行くよ！！」

先ずフォーゼは近くにいたシアゴーストを殴り近付いてきたレイドラグーンを掴み頭突きを食らわせた。

「二人共、ここは僕が食い止めるから逃げて!!」

「明久君!!」

「行こう!　うち等が居ても邪魔になるだけだから」

フォーゼはシアゴースト二体にリアットを食らわせながら言い近付こうとした瑞希の腕を美波が掴み悔しそうな表情をすると、その場を離れた。

「これ行くよ!!」

フォーゼはランチャースイッチを抜きチェンソースイッチを入れた。

【チェンソー!　チェンソー・オン】

フォーゼはチェンソースイッチを入れ右足にチェンソーモジュールを付けレイドラグーンに回し蹴りを食らわせた。

「まだまだ!!」

【ドリル・オン】

フォーゼは左足を上げ、ドリルスイッチを入れてドリルモジュールを装備すると地面にドリルモジュールを突き刺し、片足立ちの状態になるとドリルモジュールが回転し近付いてくるシアゴーストとレイドラグーンに連続で攻撃した。

「ライダー連続回し蹴り————!!」

暫く回転していたが回転が止まるとフォーゼは頭を押さえた。

「目回った、気持ち悪い」

フォーゼはドリルとチェンソーを解除してチェンソースイッチを抜きランチャースイッチを入れた。

【ランチャー！　ランチャー・オン　レーダー・オン】

フォーゼはランチャーモジュールとレーダーモジュールを装備した。

「ターゲットロック！」

フォーゼはレーダーモジュールを使いシアゴーストとレイドラゲーンに狙いを定めた。

「発射！！」

ランチャーモジュールからミサイルが放たれ空にいるレイドラゲーンと地上にいたシアゴースト、レイドラゲーンに当たった。

「あれ？ あれは」

フォーゼは遠くから二人の男子が一人の女子の前に立ち、パイプ椅子を使ってシアゴーストを殴っている所が見えた。

「よし、ならこれで」

【ロケット・オン】

フォーゼはロケットモジュールを装備するとロケットモジュールを噴射させ近付いていく。

「ライダーロケットパーーーンチ！！」

そのままフォーゼはシアゴースト達を殴り飛ばした。

「大丈夫!？」

「「「・・・・・・・・」」」

フォーゼはロケットモジュールを解除しながら言つと三人の生徒、
颯太、谷尋、花音は啞然としていた。

「えつと、誰？」

「仮面ライダーフォーゼ！　よろしく!!」

颯太が代表して聞くとフォーゼは名乗ると手を差し出した。

「えつ？　えつと」

颯太はフォーゼと握手すると数回拳をぶつけ合わせた。

「前だ!!」

「!？」

谷尋の言葉にフォーゼは振り返ったが既にレイドラグーンが爪を降り下ろそうとしていた。

（不味い！！）

フォーゼは身構えたが銃撃音が鳴り、目を開くとレイドラグーンが地面に倒れていた。

「あ、あれ？」

フォーゼが疑問に思っていると海がゴーカイサーベルでシアゴーストとレイドラグーンを切っていた。

「海！？ お前何で！！」

「それより先にこつちだ！！」

谷尋が聞いたが海はシアゴーストとレイドラグーンを蹴り飛ばしゴーカイガンでシアゴーストを撃った。

「ちっ!？」

レイドラグーンが海に殴り掛かるが海は避けたが、モバイルーツとシンケンレッドのレンジャーキーが颯太の足下に落ちた。

「何だ、これ？」

颯太はレンジャーキーとモバイルーツを手を取った。

「これ、どうすんだ？」

颯太はモバイルーツを開きレンジャーキーを鍵の状態にした。

海はレイドラグーンをゴークアイサーベルで切りながら涙を泣かした。

「よくわかんねえけど、やるしかねえ!!」

シンケンレッドはシンケンマルを抜きシアゴーストを切るとシアゴーストは消滅した。

「行ける、うおおおおおおおおおおおお!!」

次にシンケンレッドはシンケンマルでシアゴーストを何体も切っていく。

「すげえ! もう一回!!」

シンケンレッドはレイドラグーンを切るがレイドラグーンはシンケンマルを受け止めるとシンケンレッドを殴った。

「うわぁ!？」

「颯太!!」

「魂館君!!」

殴られたシンケンレッドは変身が解け颯太に谷尋と花音が駆け寄った。

「いつてえ」

「無茶すぎだ」

「そうだよ」

「危ない!!」

颯太を心配する谷尋と花音にシアゴーストを殴ったフォーゼが叫ぶとレイドラグーンが三人に向かってきていた。

「邪魔だ!!」

「どけえ!!」

海はゴーカイサーベルとゴーカイガンでシアゴーストを攻撃し、フオーゼもシアゴーストを殴るが一向に減らずレイドラグーンは段々と三人に迫っていた。

「谷尋！ 颯太！ 花音！」

三人に向かってレイドラグーンの爪が降り下ろされ・・・・・・
 ・・・・・・・。なかつた。その前に近くのガラスから赤い龍、
 ドラグレッターが現れレイドラグーンを弾き飛ばしたからだ。

「何だ、こいつ」

ドラグレッターは谷尋達を見た後ガラスの中に戻っていった。

「大丈夫ですか!？」

三人の元にさやか、杏子、マミ、まどか、ほむらが来た。

「君達は？」

さやか、杏子、マミは五人の前に出た。

「ちよつと！？」

「大丈夫よ」

花音がさやかの服の袖を掴もうとするがほむらに止められた。

「あの三人なら、大丈夫ですから」

まどかが言った後、三人はそれぞれカードデッキを前に出すと腰にベルト、Vバックルが現れた。

「「「変身！！」」」

三人はカードデッキをVバックルに装填するとさやかは赤い龍を用いた騎士の仮面ライダー龍騎に。杏子は紺の蝙蝠を用いた騎士の仮面ライダーナイトに。マミは機械的な緑の牛を用いた仮面ライダーゾルダに変身した。

「隠す気無しか」

「非常事態だし」

「んな事言ってられねえだろ」

龍騎は拳を、ナイトは剣型のダークバイザー、ゾルダはハンドガン型のマグナバイザーを構えた。

「二人共、行くわよ」

「はい!!」

「おう!!」

ゾルダはマグナバイザーでシアゴーストを撃ち、龍騎とナイトは走り出し龍騎はシアゴーストとレイドラグーンを殴り、ナイトはダークバイザーで次々と切っていくた。

「たく、谷尋！ モバイレーツとレンジャーキー渡せ！！」
「何をだ！？」
「そこにあるのだ！！」

谷尋はモバイレーツとシンケンレッドのレンジャーキーを手に取り
海に投げ渡した。

「よっしゃ！ やるか！！」

海はモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジ！！」

【ゴークイジャー！】

海はゴークイレッドになるとゴークイサーベルとゴークイガンを構

えた。

「派手に行くぜ!!」

「一体、何だよあれ」

「赤旗君、なの？」

「だと、思うが」

颯太、花音、谷尋はゴーカイレッドの姿を見て啞然としていた。ゴーカイレッドはゴーカイサーベルをシアゴーストを切り、ゴーカイガンで空に飛んでいるレイドラグリーンを撃ち抜いた。

「なら、あたし達も・・・」

「ああ・・・」

「そうね・・・」

龍騎、ナイト、ゾルダはカードデッキから一枚のカードを取り出し、龍騎は龍の頭を用いたガントレッド、ドラグバイザー、ナイトはダイクバイザー、ゾルダはマグナバイザーにカードを装填した。

【ソードベント】

【シュートベント】

龍騎の手には青龍刀、ドラグセイバー、ナイトの手には槍状の両手剣、ウィングランサー、ゾルダには大砲、ギガランチャーが握られた。

「うりゃあああああああああああああ！！！」

龍騎は体を回転させながらシアゴーストをドラグセイバーで切り、更に後ろにいたシアゴーストには周り蹴りを食らわせた。

「おらあ！ はっ！」

ナイトはレイドラグーンをウィングランサーで切り、更にシアゴーストにウィングランサーを刺した。

「行くわよ！！！」

ゾルダは飛んでいたレイドラグーンをギガランチャーで撃っていた。

「やあ!!」

フォーゼは再びチェンソーモジュールを装備するとシアゴーストに
周り蹴りを食らわせ、ロケットスイッチを押した。

【ロケット・オン】

フォーゼはロケットモジュールを装備し、上空に飛ぶとレイドラグ
ーンの羽を次々とチェンソーモジュールで切り地面に落としていく。

「うりゃ!!」

ゴークイレッドは地面に落ちたレイドラグーンをゴークイサーベル

で切り、更に至近でゴーカイガンをシアゴーストに撃った。

「ちっ！？」

「うお！？」

谷尋と颯太は花音達を庇うように近寄ってくるシアゴーストを殴っていた。

「何でこんなに多いんだよ！！」

「聞かれても困る！！」

谷尋の腕を掴もうとしたシアゴーストの腕を誰かが掴んだ。

「ツグミ！！」

「アイ！！」

シアゴーストの腕を掴んだのは綾瀬でツグミは綾瀬の車椅子を掴んだまま回り、シアゴーストの足を車椅子に引っ掛けるとシアゴース

トを投げ飛ばした。

「すげえ・・・」

ゴーカイレッドはレイドラグーンをゴーカイガンで撃ちながら二人に感心していた。

「この薄情者！ 追い掛けるの大変だったんだからね!!」

「あつ、わりい・・・」

「殆ど綾ねえ投げ飛ばしたんだけど・・・・・・・・」

怒る綾瀬にゴーカイレッドは謝りツグミに追い掛けている時の事を思い出し苦笑いしていた。

「取り合えず離れるぞ！ 明久、俺等で前行くぞ!!」

「わかった!!」

「龍と蝙蝠と牛は後ろ頼む!!」

「ちよつと!？」

「後にすんぞさやか!!」

「その通りよ。美樹さん」

ゴーカイレッドとフォーゼが前に行き、その後には谷尋達が付いて行き、最後尾に龍騎達が走っていった。

ゴーカイブルーはゴーカイサーベルで近寄ってくるシアゴースト達を次々と切っていった。

「流石に多すぎでしょ」

ゴーカイブルーはレイドラグーンが上空から来るとしゃがみ、過ぎ去ろうとするレイドラグーンの腹にゴーカイサーベルを刺しそのまま振り抜き、レイドラグーンは地面に落ちると爆発した。

「ふう・・・」

「はっ！！」

ゴーカイブルーが一息付くと声が聞こえ見てみるとゴーカイグリーンがゴーカイガンでシアゴーストを撃っていた。

「キンジ、だよね」

「集か、どうする？　まだ来るぞ」

ゴーカイグリーンに言葉にゴーカイブルーが前を見るとシアゴースト達が次々と来ていた。

「だったら、海風に、派手に行くよー!!」
「ああー!!」

ゴーカイブルーはシンケンブルーのレンジャーキーを取り出し、ゴーカイグリーンは特捜戦隊デカレンジャーのデカグリーンのレンジャーキーを取り出した。

「「豪快チェンジー!!」」

【シンケンジャー！】
【デカレンジャー！】

ゴカイブルーはシンケンブルーに、ゴカイグリーンはデカグリーンになるとシンケンブルーはシンケンマルを構え、デカグリーンはディーブラスターを構えた。

「ハアアアアアアアアアアアアアア！！」

シンケンブルーはシンケンマルでシアゴーストを切っていく、デカグリーンはディーブラスターでシアゴーストを撃っていた。

「次行くよー！！」

シンケンブルーはシンケンマルに青いディスクを付けて、回した。

「水龍の舞!!」

水を纏ったシンケンマルでシアゴースト達を次々切り倒していく。

「ふう〜」

デカグリーンは曲がり角の壁に背中を付けディープラスターを握り曲がり角の先にディープラスターを向けた。

「あっ……………」

「うお!？」

ディープラスターを向けた先には二人の男子生徒とジャンヌ、レキともう一人の女子生徒が居た。

「どうしたの？ キンジ」

「『キンジ（遠山）（遠山君）!？」』」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「知り合い、かしら？」

「武藤に不知火、それにレキ、ジャンヌ、後は」

「普通科生徒会長の供奉院亜里沙よ」

二人の男子生徒、武藤剛気と不知火亮にジャンヌ、レキは驚き、女子生徒、供奉院亜里沙は四人に聞いた。

「ええ、知り合いです」

「そうなのね」

レキは表情を変えず答えると亜里沙は頷いた。

「取り合えずここから離れよう」

「ああ、そうだな」

シンケンブルーはゴーカイブルーに、デカグリーンはゴーカイグリーンに戻ると五人を連れて走り出した。

いのりはゴーカイガンを持ち祭と共に走っていった。

「集、大丈夫かな？」

「集なら大丈夫」

いのりは走りながら違和感を感じていた。今まで全くミラーモンスターと遭遇してないからだ。

「（幾ら何でも……）……………変」

「ユズリハさん？」

ぽつりと言葉を漏らしたいのりに祭は疑問符を浮かべた。

「あつ、いのりじゃない」
「アリア・・・」

いのり達はアリア達と合流した。

「どう？」
「何が？」
「何か遭遇した？」
「今の所はないけど、それがどうしたの？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いのりはアリアの言葉を聞くと辺りを見渡した。あれだけ居たのに
どうして自分達は遭遇していないのか？それがいのりにとって不
思議だからだ。

「おい！」
「あつ、秀吉！！ だった筈」
「ムツッリーニ」
「・・・・・・・・土屋康太だ」
「やつと他の奴を見つけた」
「・・・・・・・・」
「ぎゃあああああああああああ！？」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

秀吉とムツツリーニ、雄二、翔子に秀吉に似た女子生徒と活発そうな緑髪の女子生徒が一緒に居て、翔子はいのり達を見ると雄二に目潰しを喰らわせた。

「・・・・・・・・大丈夫なの？」

「何時もの事じゃ」

アリアは苦笑いしながら聞くと秀吉は目を反らしながら言った。

「あつ！ 秀吉！ みんな！！」

「姫路に島田！！」

瑞希と美波がいのり達の元に来ると瑞希は息を切らしていた。

「大丈夫ですか？」

「あつ、はい」

祭が声を掛け瑞希は頷いた。

「それと不思議に思ったのじゃが、怪物に遭遇してないのじゃ」

「たまたまじゃないの？」

「姉上、流石におかしすぎるのじゃ」

「私も不思議に思った」

秀吉は困った顔をし、秀吉に似た女子生徒、木下優子は特に深くは考えなかったが秀吉は優子に反論すると秀吉にいのりも同意し、もう一人の女子生徒、工藤愛子が悩んでいると閃いた顔をした。

「逃げた！」

「・・・・・・何に？」

「うーん、わかんないや」

愛子の言葉にムツツリー二が聞くと笑って答えるが全員黙った。

「あつ、やっと人見つけた」

いのり達の元に一人の男性が歩いてきていた。服装からして一般人だった。

「他に人居ないの？」

「他のは、避難誘導受けて逃げたよ」

「逃げ遅れたわけか」

「ああ、けど助かった。他に人が居て」

男性はホツとしたのか腰を下ろした。

「でも、どうする？ キンちゃんとも合流したいし」

「雪ちゃんサラツと自分の願望言っただね」

「だったらアキも探さないと」

「それなら集も」

「……話が纏まらないのじゃ」

秀吉は溜め息を吐き、雄二は何かを考えていた。

「雄二・・・何考えてるの？」
「いや、何でもねえ」

雄二の事に翔子は少し疑問を感じた。

「ぐえ・・・！？」

そんな声が聞こえ振り返ってみると男性の足がガラスから出ている状態だった。

「何あれ！？」
「ワシに言われても困るのじゃ！！」

そうして居る内に男性の足は完全にガラスの中に入り、その後何かを喰らう音が聞こえた。

「何、今の音」

祭は脅えた表情で言った。いのりとアリア、白雪に理子はあの音がさっきの男性を捕食する音ではないかと思っていた。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

全員が男性の足が見えていたガラスを警戒するが後ろのガラスが波打つてくるとガラスから糸が飛び出してきた。

「ふっ！！」

ガラスから飛び出た糸をゴーカイブルーがゴーカイサーベルで切った。

「「集！！」」

「みんな気を付けて！　まだ来るよ！！」

波打っていたガラスから蜘蛛のようなミラーモンスター、ディスプレイダーが出てきた。

「蜘蛛!？」

「てかデカツ!？」

ゴーカイブルーは蜘蛛である事に驚き、理子はディスプレイダーの大きさに驚いていた。

【キシヤアアア!！】

ディスプレイダーが奇声を上げるとゴーカイブルーはゴーカイサーベルで切りかかるがディスプレイダーは足で止めた。

「結構堅いんだ……ふっ!!」

デイスパイダーは振り払うよう足を動かし、ゴーカイブルーを振り払った。

「成る程な・・・」

「雄二、どうしたの？」

「白いのとかが何でいなくなったのかわかった」

デイスパイダーを見ていた雄二は納得したような表情になると翔子が聞き雄二は自分の仮説を話し出した。

「あいつに喰われたか、あいつに脅えて逃げたかのどっちかだ」

雄二の言う通りだった。今まで姿を見せなかったデイスパイダーが何故今になってきたか？ 答は簡単だった、餌の独り占め。ミラーモンスターは人間を捕食する為、シアゴーストやレイドラグリーンが居ては餌を取られると思ったデイスパイダーが先にシアゴーストやレイドラグリーンを捕食し、逃げたシアゴーストやレイドラグリーンは追わずに人間を捕食しようとしていた。

【ギシャアアア！！】

「ふっ・・・」

ゴーカイブルーは振り下ろされたデイスパイダーの足を避けるとゴーカイサーベルをデイスパイダーの間接に当てた。

【ギシャアアア!?!】

叫ぶデイスパイダーにゴーカイブルーは近付くが別の足で振り払われた。

「ぐっ!?!」

「集!?!」

飛ばされたゴーカイブルーにいのりと祭が近付きいのりはゴーカイガンでデイスパイダーを撃っていた。

「近くからだと足で振り払われるなら」

アリアは自分の銃二丁でデイスパイダーを撃つがデイスパイダーには効いていなかった。

「伏せろ!!」

アリア達は声を掛けられ伏せるとデイスパイダーにゴーカイサーベルが投げられデイスパイダーの足の間接に刺さった。

【ギシャアアア!!?】

デイスパイダーはゴーカイサーベルが刺さった激痛で暴れ出した。

「無事か!?!」

「遅いわよ!!」

「いつてえ!!?」

ゴーカイグリーンが来るとアリアはゴーカイグリーンの足の甲を踏

んだ。

「ハア・・・・・・・・ハア・・・・・・・・ハア・・・・・・・・追いついた」

ゴーカイグリーンの後を息を切らした武藤達 came。

「取り合えず下がってろよ」

ゴーカイグリーンはゴーカイガンを撃ちながらデイスパイダーに近付きゴーカイサーベルを行きよく引き抜いた。

【キシヤアアア！！】

デイスパイダーは糸を吐くがゴーカイブルーにゴーカイサーベルで切られた。

「ハアアア!!」
「ウオオオ!!」

ゴーカイブルーとゴーカイグリーンはデイスパイダーに向かいゴーカイブルーはデイスパイダーの腹の下に潜り込み何度も切り、ゴーカイグリーンはゴーカイガンでデイスパイダーを撃っていた。

「あたし達も行くわよ!!」
「わかった」

アリアといのりはモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジ!!」

【ゴーカイジャー!】

二人はゴーカイイエローとゴーカイピンクになるとデイスパイダーに向かった。

「アリアまで……………」

「ユズリハさんも……………」

レキはディスプレイを狙ってライフルを構えた。

「レキ？」

「キンジさんが刺した間接を狙撃します」

「他の所より効くか」

「ですね。遠山君！ そいつの動きを抑えて下さい！！」

「簡単に言っな！ くっ！？」

ゴーカイグリーンは足を避けるとディスプレイをゴーカイガンで撃った。

「これ行くよ！！」

「成る程ね」

ゴーカイブルーはマジブルーのレンジャーキーを取り出すとゴーカイイエローはマジイエロー、ゴーカイグリーンはマジグリーン、ゴーカイピンクはマジピンクのレンジャーキーを取り出した。

「『豪快チェンジ！』」

【マジレンジャー！】

それぞれ魔法戦隊マジレンジャーのマジブルー、マジイエロー、マジグリーン、マジピンクになるとマジブルーとマジピンクはマジステック、マジイエローはマジステックボウガン、マジグリーンはマジステックアックスを構えた。

「まずは俺からだ。グリーンランド！！」

マジグリーンがマジステックアックスを地面に刺すと地面から蔦が生えディスプレイダーを抑えた。

「次！ イエローサンダー！！」

マジイエローがマジスティックボウガンから放った雷の矢とレキが撃った弾丸がデイスパイダーのゴーカイサーベルの刺さっていた間接に当たった。

【ギシャアアア！？】

デイスパイダーは騒ぐが薦で動けなかった。

「次！ ブルースプラッシュュ！！」
「ピンクストーム・・・！」

流水と竜巻がデイスパイダーに直撃しデイスパイダーが舞い上がり地面に落ちるとそれぞれゴーカイジャーに戻った。

「おい！」
「あつ、海！！！」

ゴーカイレッドに八尋達がゴーカイブルー達の元に来た。

「何だ？ 終わりか？」

「まだ来るよ！！」

龍騎がドラグセイバーを構えるとナイト、ゾルダもウィングランサーとギガランチャーをデイスパイダーに向け、デイスパイダーは体を捻らせ起き上がった。

「なら、派手に行くぜ！！」

ゴーカイジャーは全員の前に立った。

「ゴーカイレッド！！」

「ゴーカイブルー！！」

「ゴーカイエロー！！」

「ゴーカイグリーン！！」

「ゴーカイピンク」

「「「海賊戦隊！ ゴーカイジャー！！」」」

ゴーカイジャーはゴーカイサーベルとゴーカイガンを構えた。

「かつけえ……」

「ほら行くよ！！」

「おい！！」

「なら僕も！！」

「私も！！」

龍騎、ナイト、フォーゼ、ゾルダも走り出した。

「おらあ！！」

ゴーカイレッドはゴーカイサーベルでデイスパイダーに切り掛かるがデイスパイダーは足で弾いた。

「足の関節狙うぞ!!」

「わかった!!」

「付き合っよ!!」

フォーゼはランチャースイッチを抜き、チェンソースイッチを入れた。

【チェンソー!】

更にフォーゼはチェンソースイッチを入れた。

【チェンソー・オン】

フォーゼは右足にチェンソーモジュールを装備するとゴーカイブリー、ゴーカイグリーンと共にディスプレイダーの傷ついた関節を攻撃した。

【ギシャアア!?!】

デイスパイダーの関節はゴーカイブルーとゴーカイグリーン、フォ
ーゼの攻撃で完全に切れた。

「次行くわよ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゴーカイイエローとゴーカイピンクはデイスパイダーのもう一つの
足の関節をゴーカイガンで撃った。

「行くぞさやか!!」

「遅れんじゃないわよ!!」

龍騎はドラグセイバーで、ナイトはウィングランサーでその関節を
切ると関節は取れ掛けた。

【ギシャアア!!】

デイスパイダーは無傷な足でゴーカイジャー達を振り払うが、

「今よ!!」

ゴーカイジャー達が離れた時にゾルダはギガランチャーで取れ掛けた足を撃ち抜きデイスパイダーの足が吹き飛んだ。

【ギシャアアア!?!】

デイスパイダーは足が取れた痛みにうろたえた。

「一気に行くぜ!!」

ゴーカイレッドの掛け声と共にフォーゼはチェンソースイッチを切り、ロケットスイッチとドリルスイッチを入れた。

【ロケット・オン ドリル・オン】

ゴークアイジャーはレンジャーキーをゴークアイサーベルに装填し、龍騎とナイトもバイザーにカードを入れた。

【ファイナルウェーブ！】
【ファイナルベント】

龍騎の周りをドラグレッターが周り、ナイトは走り出し黒い蝙蝠、ダークウィングが背中につき空を飛び、龍騎もジャンプし、フォーゼはドライバーのレバーを引いた。

【ロケットノドリルノリミットブレイク！】

「ライダーロケットドリルキッーーーーーク！ー！」

ゴーカイジャーはゴーストスラッシュ、龍騎はドラゴンライダーキック、ナイトは飛翔斬、フォーゼはライダーロケットドリルキック、ゾルダはギガランチャーでデイスパイダーを撃ち抜いていった。

【ギシャアアア！？】

デイスパイダーはゴーカイジャー達の一斉攻撃を受け、爆発した。

「終わったな」

ゴーカイジャー達は変身を解くと祭達を見た。

「何、今の？」

祭が聞くと海は暫く考える表情をした。

「あのバケモンは知らねえが、俺は海賊だ」
「僕は仮面ライダーフォーゼ！ よろしく!!」

明久の言葉を聞いて殆どが苦笑いした。

「それにしても……………」
「……………」

全員が海が何を言うのか待っていると、

「クリスマス滅茶苦茶だな」
「そっちなんだ」

海の言葉に集は苦笑いして、殆どが呆れた。説明はまた今度と言った海の言葉でひとまず解散となった。

第4話 クリスマスの出会い（後書き）

次回はいつの投稿になるのやら；

後、皆様・・・・・・・・・・・・・・・・メリークリスマス！！

後良いお年を！！

第5話 勇気を胸に（前書き）

やっぱりグダグダ感MAX

けど楽しんでくれたら幸いです。

第5話 勇気を胸に

ゴーカイガレオンの中には海以外に集、アリア、キンジ、いのり、その他にも祭、颯太、八尋、花音に白雪、理子、ジャンヌ、レキ、雄二、翔子、秀吉、ムッツリー二、杏子、さやか、まどか、ほむら、マミだった。

「この人数でも入れたんだ・・・」

「それより、海はどこなんだ？」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

集が啞然としていると八尋が疑問に思っていた事を聞くとゴーカイジャーの四人は黙った。

「あいつ、どこ行っただ？」

「あたしは知らないわよ」

「僕もどこにいるかは・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

キンジが聞くとアリアは特に気にはせず、集は申し訳なさそうに、いのりは首を横に振るだけだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこからキンジが導き出した答えはただ一つ、

「居ないな・・・」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

流石にこれには全員啞然としてしまった。海が居ないとなるとゴークイガレオンがどうなっているかは誰にもわからない。

『何黙り込んでんだよ』

海の声が聞こえると全員周りを見るが、海の姿はどこにもない。

「あつ、もしかして・・・・・・・・」

集はモバイーツを取り出しどこかに掛けた。

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

全員が固唾を飲んで集を見ていた。

「あつ、もしも海？　今どこにいるの？」

集は海の上に掛け、用件を言うとモバイルーツを全員の方に向けた。

『どこって、操縦桿の所だよ。ちよつとした旅行気分だな』

それを聞いた集やいのり、レキや翔子、雄二以外は派手にずっとけた。

「そんなだったのかよ!？」
『キンジ、ちよつとうるせえ』
「うるせえじゃねえよ!！」

キンジが頭を押さえると集は苦笑いしながらモバイルーツを耳元に近付けた。

「じゃ、また後で」

集は通話を切るとそのままモバイルーツを仕舞った。

「何だったんだよ。今のやり取り」
「集、成長したのかな？」
「………何でそうなる」

杏子は殆ど呆れ、祭は嬉し涙を流し、ムッツリーニは疑問を口にした。

「集な、人と距離取ってたんだ。いつも合わせてる感じがしてな」
「だけど、そんなあいつが変わったんだ」
「それと、あの、確か……供奉院、じゃったか？ そやつはどうしたのじゃ？」

颯太と八尋は集を見て過去の事を呟き、秀吉は気になった事を聞いた。

「確か用事があるから来れないって……」
「で、桜満君。何探してるの？」

集が何かを探しながら答えると花音はそれを聞いた。

「あつた！ イタツ！？」

集は物入れから何かを見つけると頭を上げるがぶつけて、後頭部をさすりながら手に持った物を見せた。

「トランプ、何かしようと思って」

集は苦笑いし、ある事が気になった。

「あれ？ 明久に、姫路さんに島田さんは？」

「明久は涯に呼ばれ、姫路と島田はそれの付き添いだ」

（あれ？ 嫌な予感が・・・・・・）

雄二が集の問いに答えると集は何故か嫌な予感がした。

フォーゼ、涯、瑞希、美波にアルゴ、ツグミ、綾瀬は葬儀社からそんなに離れてない空き地にいた。

「準備は良いか？」

「いつでも！」

涯の言葉にフォーゼは答えると涯は9番のスイッチを投げ渡した。

「行くよ！！！」

フォーゼはドリルスイッチを抜き9番のスイッチを入れた。

【ホッピング！】

フォーゼはホッピングスイッチを入れた。

【ホッピング・オン】

フォーゼの左足にホッピングモジュールが装備されるとフォーゼは飛んでいた。

「あれ！？　うわぁ！？　わぁぁぁぁぁ！？」

暫く飛んでいるとフォーゼは上空に高く飛びそのまま落ちた。

「明久君！？」

「アキ大丈夫！？」

瑞希と美波はフォーゼに近寄り、涯は溜め息を吐いた。

「あれは、使えるのか？」

「無理だと思うけど……………」

涯の疑問にツグミは若干目を反らしながら言った。

「もう一度やってみる!」

フォーゼは瑞希と美波から離れると再びホッピングスイッチを入れた。

【ホッピング・オン】

「わああああ!」

フォーゼはまた何度も飛び落ちるのを繰り返していた。

「大丈夫なのか? あれは・・・」

「さあ?」

涯の問いに瑞希と美波は苦笑いしていた。

「はぁ……俺は用事があるから行くぞ。後は好きにしろ」

溜め息を吐いた涯はその場を後にした。

「あゝ、俺達は何で呼ばれたんだろ？」

「暇だからでしょ」

「なら皆さん、お菓子食べませんか？」

アルゴは気になった事を口に出すと綾瀬は気にする様子もなく言い、瑞希はランチボックスを取り出した。

「なら飲み物も必要だな」

「なら近くの自販機に売ってあるし」

「なら買いに行きましょう」

「うちも付き合っよう」

「道案内はお任せ」

「ツグミだけだと心配だから付いて行くね」

瑞希、美波、綾瀬、ツグミの四人は自販機に向かいアルゴはフォーゼを見ると未だホッピンググスイツチに苦戦していた。

「・・・・・・・・ちよつとなら、な」

アルゴはランチボックスを開けるとタルトが三つ入っていた。

「旨そうだな・・・・・・・・」

アルゴはタルトの一つを摘み口に入れた。

「んっ、おっ、うめぐっ!？」

タルトを食べていたアルゴは顔を青くして倒れた。

（あれ？ おかしな。俺、何で倒れてんだ）

アルゴは白目を剥き泡を吹き始めた。

ゴーカイガレオン内では集、アリア、キンジ、いのりがトランプで大富豪をし、雄二は翔子に縛られ、その他はレンジャーキーを見ていた。

「こんなのでな」

「僕等からすればカードで戦う君達の方が凄いのよ」

レンジャーキーを見ていた杏子が呟くと大富豪をしていた集が呟いた。

「すげえ・・・」

「後勝手にいじつてると海に消されるよ」

次々とレンジャーキーを取る颯太に集が言い、それを聞いた全員が凍り付いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なあ、嘘だろ」

「海の事考えると、文句は言われるよ、」

黙ってた八尋が聞くと集は表情を変えずに言った。

「マジでヤバいかも・・・・・・・・」

颯太はそう吹きレンジャーキーを仕舞った。

「なあ、霧出てきてないか？」

雄二の言葉に集達が外を見るとどんどん霧に包まれてきた。

「何だろ？」

集はメインコンピューターを操作するがモニターが乱れていた。

「私が外の様子を見てきます」

「あつ、レキこれ持って行けよ」

それに行こうとしたレキにキンジはモバイレーツを渡した。

「ありがとうございます」

レキは外に出ると数メートル先すら見えなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レキはモバイルーツを取り出し、ボタンを押した。

『はい、もしもし？』

「アリアさん、今の状況を教えます」

『わかったわ』

「数メートル先も見えない状況です」

『ありがとう』

ゴーカイガレオン内に居たアリアはモバイルーツを閉じるとモニターを見た。

「外も見えないって・・・」

「このままだと進めなくなるよ」

アリアからの報告を聞くと集は頭を悩ませた。

「どうすんだ？ これ」

「流石に乱れ過ぎじゃねえか？」

集はメインコンピューターを操作し、雄二はモニターの乱れ方に違和感を感じた。

「んっ？」

外にいたレキはゴーカイガレオンの後ろから何か接近しているのが見えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

モバイレーツを取り出しボタンを押そうとしたが何かが激突した。

「「「うわあ！？」」「
「「「きゃ！？」」「」

ゴーカイガレオン内に居た全員がフラついた。

「一体何!？」

倒れ掛けたアリアが言うとレキが中に入ってきた。

「何かが激突しました」

「何かとは？」

「見た目はHのような形でした」

「正面から見てか？」

「いえ、上からでした」

レキの言った事に秀吉が聞き、レキがキンジにモバイレーツを渡して形を言い、キンジはレキに言うとレキはそれに対して返した。

「どうしても良いが人の船にぶつかってただで済むと思っな!！」

ゴーカイレッドは舵を左に切り、ゴーカイガレオンは左に向かい側面を戦艦に向けた。

「ガレオンキャノン!!」

ゴーカイガレオンの側面から大砲が放たれ、戦艦は先端からレーザーを発射した。

「ぐっ!？」

戦艦はガレオンキャノンが当たると爆発し、ゴーカイガレオンは近くに不時着した。

「うわあ!？」

不時着した衝撃で全員倒れた。

「いてえ・・・」

「大丈夫か？」

「・・・何か」

「何とか、無事じゃ」

「うん・・・」

「酷い目にあつたよ」

「そうですね」

颯太、八尋、花音、秀吉、ムッツリーニ、理子、レキ、ジャンヌ、マミは起きたが他が起きてこなかった。

「「あつ・・・」」

「・・・！！？」

見てみると集の上にいるりと祭が、キンジの腹の上にアリア、白雪が、雄二の上には翔子が乗り、杏子とさやかは抱き合うように倒れていて、まどかとほむらも杏子とさやかのと似ていた。因みにムッツリーニは誰かの胸元を見たのか鼻血を噴射した。

「二人共、降りて」

「頼む、苦しい」

「早く、降りろ」

男三人は苦しそうに言った。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／」」」

そんな三人に乗っている女子達は顔を赤くしていた。

「さやか、平気か？」

「何とか・・・・・・・・」

「まどか、立てる？」

「うん、ありがとう」

何とか立ち上がったが集、キンジ、雄二の顔色は悪かった。

「僕達が外に出るから待ってて・・・・・・・・」

集がそう言つと集、アリア、キンジ、いのり、さやか、杏子、マミは外に出た。

「情けないけど、俺達が出ても足手まといか・・・」
「八尋君・・・」

八尋は外に出ていく集達を見て唇を噛みしめ、花音はそんな八尋を心配した。

七人が外に出るとプラグが体に付いてる、サラマンデスがズゴーンとズゴーンを引き連れていた。

「貴様等、何故作戦がわかった!？」
「勝手にぶつかっただけだろ」

サラマンデスが言うとキンジは呆れたように言うとゴーカイレッドが降りてきた。

「てめえ等か、人の船にぶつかったの」

「だから何だ？」

「覚悟しやがれ！！」

「はあ……………」

ゴーカイレッドの言葉に集とキンジが溜め息を吐くと集、アリア、キンジ、いのりはモバイレーツとレンジャーキーを構え、さやか、杏子、マミはカードデッキを構え腰にはVバックルが現れた。

「「「豪快チェンジ！！」」」

「「「変身！！」」」

【ゴーカイジャー！】

集、アリア、キンジ、いのりの四人はゴーカイジャーになり、さや

かは龍騎、杏子はナイト、マミはゾルダになるとそれぞれの武器を構えた。

「派手に行くぜー!!」

ゴーカイジャーはゴーカイガンでゴーミンを撃ちながら近付き龍騎はドラグバイザーにカードを装填した。

【ソードベント】

龍騎はドラグセイバーを握ると近付いてきたゴーミン達を切り、ナイトはダークバイザーで切り、ゾルダはマグナバイザーでゴーミンを撃った。

「行くぜー!!」

ゴーカイレッドはズゴーミンをゴーカイサーベルで切り、蹴り飛ばすとゴーカイガンで撃った。

「ハアッ！」

ゴークイグリーンはズゴーミンを掴むと地面に転がした。

「ズゴーー!!」

ズゴーミンはクローをゴークイグリーンに向けて突きを放つがゴークイグリーンは避けるとゴークイガンで撃ち、次にゴークイサーベルでズゴーミンを切った。

「ハッ・・・！」

「ヤッ！」

ゴークイイエローとゴークイピンクはゴークイサーベルでズゴーミンを切り振り返るとゴークイガンで撃った。

「食らえ!!」

「うわぁ!?!」

ゴーカイブルーはサラマンデスの攻撃を避けるとゴーカイサーベルでサラマンデスを切りゴーカイガンで撃ち、サラマンデスの腹を蹴った。

「締めと行くか」

「させるかぁ!!」

ゴーカイジャーと龍騎達が並ぶとサラマンデスはプラグを地面に刺した。

「何だ?」

ゴーカイレッドが首を傾げると地面がひび割れてきた。

「何!？」

「終わりだああああ!!」

サラマンデスが叫ぶと地面が爆発した。

「「「うわああああ!？」」「」

「集!？ いのりちゃん!？」

「キンちゃん!？ アリア!？」

「さやかちゃん!？ 杏子ちゃん!？ マミさん!？」

「海!？」

それを見ていた八尋達は叫び、爆炎が消えるとゴーカイジャーと龍騎達の姿はなくサラマンデスもどこかに去っていった。

城の中では黒十字王が腕を組んでいた。

「奴等め、どこでサランデスに地核を刺激させ世界中の火山を爆発させる計画が分かったのだ？」

黒十字王は暫く考えていたが組んでいた腕を解いた。

「まあ良い。先に海賊を潰させるか」

黒十字王は顎を何度か触った。

明久と瑞希、美波は帰路に付いていた。その後、四人が戻ると死にかけのアルゴを見つけ葬儀社に引き吊りながら戻り、帰る事になった。

「色々疲れたよ」

「落ちたりしたしね」

「大丈夫ですか？ 明久君」

明久は疲れた顔をし、美波は苦笑いし、瑞希は心配そうな顔をした。

「はぁ・・・・・・・・んっ？」

明久は溜め息を吐いた後近くのガラスを見て違和感を感じた。写るはずの景色が写らずそれが移動してたからだ。

「あれって、もしかして」

「どうしたのよアキ？」

「明久君？」

「二人共、離れてて・・・・・・・・」

明久に言われて瑞希と美波は取り合えず離れると明久はゴミ箱にあった空き缶を拾いガラスの方に向かって投げた。

「明久君！？」

「なにやってんの！？」

瑞希と美波は驚いていたが空き缶はガラスに当たらず別の何かに当たった。

「「えっ？」」

瑞希と美波はその光景に驚き、明久の顔は確信に変わった。

「やっぱり、ガラスには鏡と同じように写る筈なのに一部分、それも動くように写らないとなると、何か居るって思ってたね」

「アキ大丈夫！？ 頭が冴えてるけど！！」

「明久君、病院行きましょう！！」

「僕に別に平気だからね！！」

そう言っている内に空き缶が当たった場所にカメレオンのような、カメレオンゾディアーツが出てきた。

「あれは、カメレオン？」

「カメレオンは景色と同化する事が出来ますから」

「見えない訳ね」

「二人共離れて!!」

明久は腰にフォーゼドライバーを付けスイッチを入れた。

【3・・・・・・2・・・・・・1・・・・・・】

「変身!!」

明久がレバーを引くとフォーゼに変身すると屈んだ。

「宇宙、キター――――!!!!」

「フッ・・・・・・」

フォーゼが万歳のように両手を上げるとカメレオンゾディアーツは鼻で笑った。

「仮面ライダーフォーゼ！ 行くよ！！」

フォーゼは背中のブースターを吹かし一気にカメレオンゾディアーツに近付き、蹴り飛ばした。

「うおっ！！」

次にフォーゼはカメレオンゾディアーツに殴り掛かるがカメレオンゾディアーツは透明になりフォーゼの拳は空を切った。

「あれ？」

フォーゼは辺りを見渡し警戒した。

「うわぁ!?!? ぐわぁ!?!?」

フォーゼは次々と周りから攻撃を受けた。

「どうしたら………ぐわぁ!?!?」

フォーゼは倒れると立ち上がり辺りを見渡した。

「どうしよう。相手には見えてこっちに見えないなんて………
うわぁ!?!?」

瑞希はカメラスイッチとフードモードのバガミールを取り出し、スイッチを入れてロイドモードにした。

「何時の間に持ってたの?」

「いえ、ツグミさんに、一応と渡されたので………」

バガミールを取り出した事に美波は驚き、瑞希は苦笑いしていた。

「ぐわあ！？」

「「^{アキ}明久君！？」」

フォーゼはまた攻撃を受けると次は攻撃が来た方向の反対から攻撃が来た。

「うわあ！？ 一体、どうすれば……………」

フォーゼは辺りを警戒しながら立ち上がった。

「んっ………んっ………」

森の中で倒れていた集は目を開けて起き上がった。

「ここは、確か………」

集の脳内にフラッシュバックする光景は爆発により全員が吹き飛ばされるところだった。

「！？ みんなは！？」

集は辺りを見渡し人影を探す。

「みんなあああああああ！！ 海iiiiiiiiiiii！！！！いのりiiiiiiii！！！！！！」

集の声を返すものはなく鳥の囀りや風で木の枝が揺れる音位しか聞こえなかった。

「みんな、どこに」

集は息を切らして一回立ち止まった。

「はあ．．．．．はあ．．．．．はあ．．．．．はあ．．．．．はあ．．．．．
．．．はあ．．．．．」
「集――――！！！」

集は呼ばれて振り向くといのりが走ってきていた。

「いのり！ 大丈夫だった！？」
「うん、大丈夫」

集はいのりに駆け寄ると集は周りを見た。

「みんな、飛ばされたのかな？」

集がそう呟くと二人のモバイレーツが鳴った。

「繋がったか、全員聞こえるか」

海はさやか、杏子と背中合わせになりながらモバイレーツを持っていた。

「ここから若干だが火山が見えてな。もしかしたら火山が狙いだと思っただが……」

『どうした？』

「すぐには行けねえ」

『こっちも同じだ』

海達の周りにはズゴーマン二体がゴーマン達を引き連れ、キンジ、アリア、マミの所にはズゴーマンとゴーマン達がいた。

「どうするかだよな………」

『僕等の方には居ないから僕等が行くよ』

「分かった」

海は通話を切りレンジャーキーを取り出し、さやかと杏子はカードデッキを構えVバツクルを出現させた。

「豪快チェンジー!!」

「変身!!」

【ゴークイジャー!】

海はゴークイレッド、さやかは龍騎、杏子はナイトになるとゴークイレッドはゴークイサーベルとゴークイガン、龍騎は拳、ナイト

はダークバイザーを構えた。

アリアとキンジ、マミはズゴーマン達に追われ崖の端に來ていた。

「そろそろ行くか……………」

「そうね……………」

「はい……………」

キンジはアリアはレンジャーキーとモバイレーツを構え、マミはカードデッキを構えVバツクルを出現させた。

「「豪快チェンジ!!」」

「変身!!」

【ゴーカイジャー！】

ゴーカイイエロー、ゴーカイグリーンはゴーカイガンでゴーミン達を撃ち、ゾルダもマグナバイザーでゴーミン達を撃った。

集といのりは森の中を走っていたが集の足が止まった。

「集？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

集の手は微かにだが震えていた。

「集？ どうしたの？」

「いのり、僕は・・・・・・・・戦うのが怖い」

集はいのりを見る事なく呟いた。

「今まで戦つて今更だよね。けど、今更だから………戦うのが怖いんだ」

いのりはそんな集を後ろから抱き締めた。

「いのり？」

「集、怖いので………当たり前だよ。私も、きっと海も怖い筈だよ。怖くない事なんて、ないから」

「いのり………」

「………」

いのりは歌を歌いだした。歌を歌ういのりは美しく集はその姿に見取れた。

「………」

集は時間が経つ事さえ忘れいのりを見ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いのりは歌い終わると集の方を見た。

「勇気、出た？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

集は一度目を閉じて再び目を開けるとそこには覚悟があつた。

「ありがとう。僕に、勇気をくれて」

いのりは集に手を差し出すと集はその手を握り先に進んで行った。

第5話 勇気を胸に（後書き）

次回に続きます。スーパー戦隊の大いなる力も出します。

次回、勇・気・爆・発

第6話 勇・気・爆・発（前書き）

グダグダですけど、楽しんでくれたら幸いです。

第6話 勇・気・爆・発

集はゴーカイサーベルを握りゴーミンを切り、いのりはゴーカイガンでゴーミンを撃ち抜いていた。

「ハアアアアア！！」

集は次々とゴーミンを切り倒し、いのりは集の後ろから来たゴーミンを撃ち抜き、ゴーミン達を一掃していた。

「一体どこに！？」

「次はあっち行こう」

「わかった！！」

集といのりはサラマンドラを探し、駆け出した。

ゴーカイレットはゴーカイガンでゴーミンを撃つと周りに来たゴーミン達をゴーカイサーベルで切った。

「うりゃああああ!!」

龍騎はドラグセイバーを握りズゴーミンを切り、次にゴーミンに蹴りを入れた。

「おらあ!!」

ナイトはウィングランサーでズゴーミンを切り、更にゴーミンを切った。

「決めるぞ!!」

「おう!!」

「了解!!」

ゴーカイレッドはレンジャーキーをゴーカイサーベルに差し込み、龍騎とナイトはバイザーにベントカードを入れた。

【ファイナルウェーブ！】

【ファイナルベント】

龍騎はドラゴンライダーキックの構えをし、ナイトの背中にはダークウイングが付き、ナイトは空を飛び、ゴーカイレッドは力を溜めた。

「ゴーカイスラッシュー！！」

ゴーカイレッドはゴーカイスラッシュ、龍騎はジャンプしてズゴーマンに向かってドラグレッターから吐かれた火を纏ったドラゴンライダーキック、ナイトはダークウイングがマント状になり回転して貫く飛翔斬をズゴーマンに放った。

「ズゴーマン！？」

ズゴーミンは電気を発しながら爆発した。

「早く行くぞ………」

「そうですね」

「兎に角、あのプラグ野郎を探すぜ」

ゴーカイレッド達も走り出した。

ゴーカイイエローとゴーカイグリーンはレンジャーキーを取り出した。

「ねえ、あんた………」

「………私ですか？」

ゴーカイイエローはゾルダを呼び止めるとレンジャーキーを見せた。

「牛一人だと寂しいでしょ」

「あまり牛、言わないで下さい。悲しくなりますから」

ゾルダは仮面の下で涙を流しながらゴーカイイエローを見た。

「あんな、あまり言わない方がいいだろ」

「うるさいわよ!!」

ゴーカイイエローとゴーカイグリーンはレンジャーキーを構えた。

「「豪快チェンジ!!」」

【ガオーレンジャー!!】

【ライブマン！】

ゴーカイイエローは超獣戦隊ライブマンの牛のようなマスクのブラックバイソンになり、ゴーカイグリーンは百獣戦隊ガオレンジャーの牛のようなマスクのガオブラックになり、ブラックバイソンは槍状の武器、バイソンロッド、ガオブラックは斧状の武器、バイソンアックスを構えた。

「行くぞー！！」

「わかってるわよー！！」

「行きましょう」

ガオブラックはバイソンアックスでゴーミンを切り、ブラックバイソンはバイソンロッドでゴーミンを薙払い、更に叩きつけ、ゾルダはマグナバイザーで的確に撃っていた。

【シュートベント】

「下がって下さいー！！」

ギガランチャーを持ったゾルダが言っているとガオブラックとブラックバ
イソンは後ろに下がるとゾルダはギガランチャーを撃った。

「「「ゴー!?!」」」
「ズゴー!?!」

ゴーミン達は爆発し、ズゴーミンは仰け反った。

「うおおおお!!」
「はああああ!!」

ブラックバイソンはバイソンロットを光らせ、振るい光線を放つバ
イソンスパークをズゴーミンに放ち、ガオブラックはバイソンアッ
クスで切る、アイアンブローケンを放った。

「ズゴー!?!」

ズゴーミンはそのまま爆発した。

「行くか」

「そうしましょう」

「ええ、早くしないと」

ブラックバイソンはゴーカイイエローに戻り、ガオブラックもゴーカイグリーンに戻った。

「見つけたぞ！ 海賊！！」

三人の前にサラマンドムが地面から出てきた。

「生えてきたな」

「そうね」

「キノコですかね？」

「違う！ それにさつき会ってるだろ！！」

「「会ったつけ（かしら）？」」「」

「貴様等ああああ！！」

サラマンドムは爪を振り上げ三人を攻撃しようとするが三人は避けた後、サラマンドムを撃った。

「取り合えず探してた奴は見つけたからな」
「ここで叩くわよ!!」

ゴーカイイエローとゴーカイグリーンはレンジャーキーを取り出した。

「今度は緑ね!!」
「ああ、わかった!!」

ゴーカイイエローとゴーカイグリーンはレンジャーキーを構えた。

「「豪快チェンジ!!」」

【タイムレンジャー！】

【ゴーオンジャー！】

ゴークアイエローは未来戦隊タイムレンジャーのタイムグリーンになり、ゴークイグリーンは炎神戦隊ゴーオンジャーのゴーオングリーンになった。

「ボルパルサー！！」

タイムグリーンは二連マシンガン、ボルパルサーでサラマンドムを撃ち、ゾルダもマグナバイザーで撃った。

「ぐわあ！？」

「ブリッジアックス！！」

サラマンドムが仰け反るとゴーオングリーンは橋の橋梁を用いた大斧、ブリッジアックスを持ちサラマンドムに向かった。

「アックスツーリング!!」
「ぐわぁ!?!」

刀状の衝撃波を飛ばす、アックスツーリングをサラマンドムに食らわせ、サラマンドムは地面に転がった。

「ここで倒される訳にはいかん!!」

サラマンドムは地面に潜って逃げた。

「逃げられたか」
「けど、無傷じゃない筈よ」
「遠くには行ってないかもしれませんね」

タイムグリーンはゴーカイイエローに戻り、ゴーオングリーンはゴーカイグリーンに戻ると、ゾルダと共に走り出した。

フォーゼはカメレオンゾディアーツに苦戦させられていた。カメレオンゾディアーツは透明になるとフォーゼの後ろから攻撃し、フォーゼが振り向くと後ろから攻撃するの繰り返しだった。

「ホントにどうしよう………」

フォーゼが悩んでいるとレーダースイッチの部分が光り、フォーゼはレーダースイッチを入れた。

【レーダー・オン】

フォーゼは左腕にレーダーモジュールが装備された。

『何か大変そうね』

「ツグミさん！？ どわぁ！？」

フォーゼのリーダーモジュールからツグミが通信し、フォーゼが驚いているとまたカメレオンゾディアーツに攻撃された。

『大変そうね。まあ、ホッピング持ってる？』

「持ってるけど」

『ホッピング使って』

「・・・・・・わかった」

フォーゼはドリルスイッチを抜き、ホッピングスイッチを入れた。

【ホッピング！ ホッピング・オン】

フォーゼの左足にホッピングモジュールが装備されるとフォーゼはランダムに飛んだ。

「うわぁ！？ うお！？ うえ！？」

・ フォーゼがホッピングモジュールの扱いに苦戦していると……

「ぐわあ!？」
「えっ？」

何かに当たりそれは地面に転がり、カメレオンゾディアーツが姿を現した。

「あれ？ 何で？」
『下手な鉄砲数撃ちや当たる。ホッピングはランダムだからそのうち当たるって訳よ』

フォーゼは頷くとホッピングスイッチを切り、チェンソースイッチを取り出した。

「行くよ!!」

【チェンソー！】

フォーゼはチェンソースイッチを入れた。

【チェンソー・オン】

フォーゼの右足にチェンソーモジュールが装備されるとカメレオンゾディアーツに向かって走り出し、回し蹴りを決めダメージを与えた。

「はぁ！ やぁ！ うおおおお！！！」
「ぐっ！ がぁ！ ぐわぁぁぁ！！？」

フォーゼは次々とカメレオンゾディアーツに回し蹴りを決めていた。

「もう終わりだよ。スイッチを渡して」

フォーゼはチェンソーモジュールを解除して、カメレオンゾディアーツに手を差し伸べるが、カメレオンゾディアーツは舌でフォーゼを叩き付けた。

「イタッ!？」

その間にカメレオンゾディアーツは透明化して逃げた。

『逃げられた!』

「追うから平気!!」

「アキちよつと待ってよ!!」

「明久君、待って下さい!!」

フォーゼはリーダーモジュールを解除して、変身を解くと走り出し、瑞希と美波は明久を追い掛けた。

（ラストワンになる前に止めないと・・・・・・・・！！）

明久は前のオリオンゾディアーツ戦でのラストワンを見て、人に戻れなくなる可能性がある事を知り止めようとしていた。

（人に戻れないなんて、僕はやだ！！）

明久が必死になって走っていると曲がり角で誰かとぶつかった。

「すみません、って久保君」

「吉井君！？（なぜこんな所に？ まさか運命！？ 僕と吉井君はそう言う運命なんだ！！）」

明久にぶつかった眼鏡をかけた少年、久保利光。天ノ川学園召喚試験科の2年A組の次席だが、実は同性愛者であり、明久に惚れている。天ノ川学園には普通科、武偵科、召喚試験科の三つがあり三つの科に共通する事は生徒の自由を尊重する事。

「吉井君はなぜここに？」

「ごめん！ 僕急ぐから！！」

「あっ！ 吉井君んんんん！！」

明久は利光を気にせず走り出した。利光は明久に向かって手を伸ばした。

集といのりは道なき道を走っていると崖に付き、崖の先にはまだ道があった。

「いのり、僕が先に行くから」

「集・・・大丈夫？」

「うん、平気だよ」

いのりは集の肩に手を置くと集は優しく掴み、離すと助走を付けた。

（ここから向こうまで約七メートル、助走を付ければ行ける筈）

集は息を吐くと、迷いなく走り出しそのまま飛んだ。

（後、少し！！）

後少しで付きそうな時、向かい側の崖からサラマンドムが飛び出てくると集に掴まった。

「うわぁ！？」

「丁度良い！　まずは貴様から始末してやる！！」

集はゴーカイサーベルを握るとサラマンドムを斬った。

「ハアアアア！！」

「ぐわぁぁぁ！！？」

いのりは駆け出し、崖を飛ぶとゴーカイガンを構えた。

「いのり!？」

集はいのりがゴーカイガンを構えた事に驚いたが、集の上から崩れる音が鳴ると、集は上を見ると岩が迫ってきて、いのりはゴーカイガンで岩を撃ち、岩は細くなり集の周りに散り、いのりは崖に着地した。

「集! 平気!？」

「うん! 上がってくるから先に行つて!！」

集はゴーカイサーベルを抜くと、出っ張っている岩を掴みながら上に上がっていき、崖の部分に付くと集は誰かに手を掴まれた。

「えっ?」

集が上を見るといのりが集の手を掴んでいた。

「いのり．．．．．」

「上がる？」

「あつ、うん」

集が上がるといのりは集に抱き付いた。

「よかった．．．．．」

「えっ、と．．．．．何が？」

「集が無事で」

集はそれを聞くといのりを抱き返した。

「心配かけて、ごめん」

「ううん。無事なら良かった．．．．．」

二人が暫く抱き合っていると何かの音が聞こえた。

「くそがあー!!」

サラマンドムが地面から出てくると集といのりは離れた。

「やっと見つけたぜ」
「探したわよ」

そこに、ゴーカイレッド達とゴーカイイエロー達が来た。

「みんな……」
「集、行けるよな」

ゴーカイレッドの問いに集は頷くと、いのりと共に前に出て、モバイレッツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジ!!」

【ゴーカイジャー!】

集といのりがゴーカイジャーになると全員が並んだ。

「ゴーカイレッド!!」

「ゴーカイブルー!!」

「ゴーカイエロー!!」

「ゴーカイグリーン!!」

「ゴーカイピンク!!」

「海賊戦隊.....」

「『ゴーカイジャー!!』」

ゴーカイジャーはゴーカイサーベルとゴーカイガンを構えた。

「派手に行くよ!!」

「うん.....」

「おい.....!」

ゴークイブルーが言うとゴークイピンクが頷き、走り出すとゴークイレッド達は啞然としていた。

「何があつたんだ？」

「「「さあ？」」」

「ゴーマン！！」

「「「ゴー！！」」」

ゴークイレッドが悩むと、ゴークイイエロー達は首を傾げ、サラマンドラムが叫ぶと、どこからともなくゴーマン達が来た。

「ゴーマンはあたし達が相手するぜ！」

「行きましょう！ マミさん！！」

「ええ！！」

「任せたぜ！！」

龍騎、ナイト、ゾルダはゴーマン達を相手し、ゴークイレッドが頷いた後、サラマンドラムにゴークイジャー達が向かっていった。

路地裏で一人の少女がゾディアーツスイッチを握っていた。

「これさえあれば……………」

少女は数回スイッチを回していると路地から明久が慌てて来た。

「ねえ！ そのスイッチ！！」
「うわあああ！？」

少女はいきなり明久に声を掛けられスイッチを投げそうになったが、慌てて掴んだ。

「そのスイッチ……………」

「何よ。私のよ」

少女はスイッチを隠すように持ち、そこに瑞希と美波も到着した。

「それは！」

「何よ！ 私だから私の好きに使って良いでしょ！？」

【ラストワン】

その音声と共にゾディアーツスイッチを見ると、ラストワン形態に変わった。

「これが、私の力」

「！ 押しちゃ駄目だ！！」

明久が手を伸ばすが少女はスイッチを押すと、明久は飛ばされた。

「アキ!？」

「明久君!　しっかりして下さい!！」

明久は唇を噛みしめていた。

「二人共、離れて」

「明久君は、どうするんですか？」

「止める。じゃないと、いけないから」

「アキ・・・・・・無茶しないでね」

「わかってる」

明久は腰にフォーゼドライバーをつけて、スイッチを入れた。

【3・・・・・・2・・・・・・1】

「変身!！」

明久はレバーを入れ、右手を上げると、仮面ライダーフォーゼに変身した。

「宇宙、キターーーーーー!!!!!!」
「馬鹿らしい」

カメレオンゾディアーツはフォーゼを小馬鹿にした様子で見るとフォーゼは右手を突き出した。

「仮面ライダーフォーゼ！ 君を止める!!」
「うるさい!!」

フォーゼはカメレオンゾディアーツを掴むと背中をブースターを吹かした。

「はっ!!」
「ぐっ!?!」

フォーゼはカメレオンゾディアーツを投げ飛ばすと次に蹴りを入れた。

「ふっ！！」

「うわぁ！？」

カメレオンゾディアーツは舌でフォーゼを叩き付けると近付き、フォーゼに膝蹴りを入れた。

「がはっ！？」

フォーゼが地面に転がるとリーダースイッチの部分が鳴り、フォーゼはリーダースイッチを入れた。

【リーダー・オン】

フォーゼは左腕に現れたリーダーモジュールを見た。

『何か苦戦してるみたいね』
「いや苦戦してるから!!」

リーダーモジュールからプリンを食べながら通信してきたツグミに
フォーゼは叫んだ。

「どうすればふっ!？」

喋ろうとしたフォーゼにカメレオンゾディアーツが舌で叩き付けた。

「明久君!？」

「どうしよう……………」

バガミールを起動させて見ていた瑞希は叫び、美波は頭を悩ませた。

『ねえ、ナンバー5のスイッチ持ってるでしょ』

「持ってるけど……」

『使ってみれば、じゃ』

「ちよつと!？」

ツグミが言った後、フォーゼがスイッチを取り出すとツグミは通信を切った。

「取り合えず……」

フォーゼはナンバー5スイッチ、マジックハンドスイッチをロケットスイッチと入れ替えた。

【マジックハンド!】

次にフォーゼはスイッチを入れた。

【マジックハンド・オン】

フォーゼの右腕にマジックハンドモジュールが装備された。

「おお、よし」

フォーゼはマジックハンドモジュールを見て感心すると、カメレオンゾディアーツを掴んだ。

「ぐっ！？ 放せ！！」

「それ！！」

「うわああああああああああ！！！！！！！！！！」

フォーゼはマジックハンドモジュールで掴んだカメレオンゾディアーツを投げ飛ばし、カメレオンゾディアーツは壁に叩き付けられた。

「凄いな、これ」

フォーゼはカメレオンゾディアーツを見るとマジックハンドスイッチを切った。

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

フォーゼは走っていき、カメレオンゾディアーツを殴った。

「次！！」

フォーゼはチェンソースイッチを取り出し、ランチャースイッチと入れ替えた。

【チェンソー！ チェンソー・オン】

フォーゼは右足にチェンソーモジュールを装備すると、カメレオンゾディアーツに次々と回し蹴りを決めた。

「ぐはっ！？ がっ！？」

フォーゼはチェンソーモジュールを解除すると、ランチャースイッチとチェンソースイッチを入れ替えた。

【ランチャー！ ランチャー・オン】

フォーゼは右足にランチャーモジュールを装備して、ミサイルをカメレオンゾディアーツに放った。

「うわあああああああああああああ！？」

カメレオンゾディアーツが上空に上がると、フォーゼはランチャースイッチを切り、マジックハンドスイッチとロケットスイッチを入れ替えて、ロケットスイッチとドリルスイッチを入れた。

【ロケット！ ロケット・オン ドリル！ ドリル・オン】

フォーゼはロケットモジュールとドリルモジュールを装備して、上に上がるとレバーを入れた。

【ロケットノドリルノリミットブレイク！】

「ライダーロケットドリルキー――――――」
「ックー！」

ロケットで加速し、ドリルを回転させてカメレオンゾディアーツを貫いた。

「ぐわあああああああああああ！？」

カメレオンゾディアーツが爆発すると、ラストワン状態のゾディアーツスイッチが飛んでくると、フォーゼはそれを掴みスイッチを切

り、ゾディアーツスイッチは消滅した。

「後で、事情聞こう」

フォーゼは変身を解き、戻ると瑞希と美波の元に向かった。

龍騎、ナイト、ゾルダはゴーミン達を見ていた。

「数多いな……………」

「確かに……………」

「嫌になりそうね。この数は」

ゴーミン達に来る中、龍騎達はゴーミン達の攻撃を受け流していた。

「ファイナルベント使っわよ」

「あっ、使っちゃいました」

「あたしも……」

それを聞いたゾルダは頭を抱えた。

「なら、時間を稼いでくれないからしら？」

「はい!!」

「オッケー」

龍騎はゴーミン達を殴り、ナイトはダークバイザーで切っていった。

「時間稼ぐなら」

龍騎はカードデッキから一枚のベントカードを取り出し、ドラグバ
イザーに入れた。

【ストライクベント】

龍騎の右腕にドラグレッターの頭を模した手甲、ドラグクローが装備された。

「おっしゃ！ 杏子、退いて!!」

ナイトが退くと龍騎の周りにドラグレッターが飛び、龍騎は構えた。

「うりゃああああああああああ!!!!!!!!!!」

龍騎がドラグクローを前に突き出すと、ドラグレッターが火を吐く、ドラグクローファイヤーを放ち、ゴーミン達は何体か爆発した。

「今ね……」

ゾルダはカードデッキからベントカードを取り出し、マグナバイザーに入れた。

【ファイナルベント】

地面から機械的な牛、マグナムギガがゾルダの前に現れるとゾルダはマグナバイザーをマグナムギガの背中に付けると、マグナムギガは両腕を前に向けた。

「二人共、準備良いわ!!」

龍騎とナイトはその場から飛び退き、マグナムギガの胸のハッチが開き、ゾルダはマグナバイザーの引き金を引くと、マグナムギガが付けている銃火器を一斉に放つ、エンドオブワールドを放った。

「「「ゴー!?!」」」

ゴーミン達はミサイルやレザー、弾丸を受け、爆発した。

「うつひゃー、凄い威力」

「いつ見ても啞然とするぜ」

龍騎とナイトは啞然としていると、ゾルダは変身を解いた。

「これで終わりね」

「あはははは………」

龍騎とナイトは苦笑いしながら変身を解いた。

ゴーカイジャーはサラマンドムと共に海岸にいた。

「行くぜ!!」

ゴークイレッドの掛け声と共に他のゴークイジャーはサラマンダムをゴークイガンで撃った。

「ちっ!?! なめるな!!」

サラマンダムはプラグを地面に刺すと、ゴークイジャーの立っている地面が爆発した。

「「「うわあああああ!?!」」」

ゴークイジャー達が地面に転がると、ゴークイブルーが立ち上がった。

「相手がああ言うのなら、僕達は魔法を使おう!!」

「ああ、そうだな」

ゴーカイジャー達はマジレンジャーのレンジャーキーを取り出し、構えた。

「「「豪快チェンジ！」「」」」

【マジレンジャー！】

ゴーカイジャーはモバイレッツを上に掲げると、魔法陣がゴーカイジャーの体を通り過ぎるとスーツが変わり、ゴーカイレッドはフェニックス、ゴーカイブルーはマーメイド、ゴーカイイエローはガルーダ、ゴーカイグリーンはタウロス、ゴーカイピンクはフェアリーを模したゴーグルのマスクの魔法戦隊マジレンジャーに豪快チェンジした。

「魔法戦隊！」

「「「マジレンジャー！」「」」」

マジレンジャーが構えるとマジレンジャーから着信音が鳴り、マジレンジャーは探り携帯、マジフォンを取り出すとボタンが光った。

「新しい魔法？」

「だな、てかメールで来るのか」

「使ってみない？ 早速」

「うん……」

「ああ、行け」

マジフォンを右手に持つと光ったボタンを押した。

「マジ・マジ・ゴー・ゴーカイ!!」

【マジ・マジ・ゴー・ゴーカイ】

5人のマジフォンから光が放たれ、一つになり、サラマンドラに当たるとサラマンドラのプラグがサラマンドラの体に巻き付いた。

「な、何だこれは!？」

5人はそれぞれマジスティックを取り出し、武器にした。

「じゃ、俺から行くぜ」

マジグリーンが前に出た。

「グリーンランド!!」

マジグリーンがマジスティックアックスを地面に刺すと、地面から
蔦が出るとサラマンドラを縛った。

「ぐっ!？」

「次はあたしよ!!」

マジイエローはマジスティックボウガンを構えた。

「イエローサンダー！！」

マジスティックボウガンから稲妻の矢が何本もサラマンドムに直撃した。

「うわあああああ！！？」

「次……」

マジピンクはマジスティックを構えた。

「ピンクストーム……！」

ピンク色の竜巻がサラマンドムを吹き飛ばした。

「うおおおおお！？」

「僕だね」

サラマンドムが地面に落ちるとマジブルーはマジスティックを構えた。

「ブルースプラッシュー！」

地面から水柱が立ちサラマンドムは飛んだ。

「ぐわあ！？」

「とどめだ」

サラマンドムが地面に叩き付けられるとマジレッドはマジスティックソードを構えた。

「ジ・マジカ！ レッドファイヤーー！！」

マジレッドは体に炎を纏うと、フェニックスのようになりサラマンドに体当たりした。

「うわあああああ！？」

サラマンドが倒れると、マジレンジャーはゴーカイジャーに戻った。

「ぐっ、くっそ」

「次こそ終わりだ！！」

ゴーカイガンからゴーカイシリンダーを立てるとレンジャーキーをセットした。

【ファ～イナルウェーブ！】

「ゴークイブラスト!!」

ゴークイガンから強力な弾丸を放ち、すべてサラマンドムに当たった。

「ぐわあああああああああああああ!!??」

サラマンドムは叫び声を上げながら爆発した。

「うつ・・・」

少女が目を開けると、明久、瑞希、美波が少女の顔を除き込んでいる。

「大丈夫？」

明久達は少女に付いている糸を取っていた。

「何であのスイッチ、使ったの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・私、武偵何だけど、全然駄目なんだ」

明久の問いに少女は静かに答えていく。

「悩んでたら、蠍みたいな奴に、スイッチを貰って、それから何回も使った」

「教えてくれてありがとう」

明久は笑顔で言うと少女は静かに頷き、明久は立ち上がった。

「蠍みたいになって、そいつがスイッチをばらまいてるのかも」

「それしか考えられないわね」
「でも、どうしてでしょう？」

三人は頭を悩ませた。

黒十字王は城の中で苛ついていた。

「またしても海賊に破れるなど！！」

黒十字王は黒いオーラを地球に向けて放った。

「やったな」

「何とかね」

ゴークアイジャーは音が聞こえて上空を見ると、ゴークアイガレオンが来ていた。

「ガレオンが、動いてる……………」

ゴークアイグリーンが呟くとゴークアイレッドのモバイレーツが鳴り、ゴークアイレッドは通話に出た。

「誰だ……………」

『わしじゃ』

「秀吉か、つかどうやって動かしてんだ？」

『雄二が動かしているんじゃない』

「わかった。一回戻って……………ん？」

サラマンドムが倒された場所に黒いオーラが落ちると、黒いオーラは人型になっていき、巨大なサラマンドムになった。

「ちっ!？」

ゴークイレッドはモバイレーツのボタンを押した。

【ゴークイガレオン!】

ゴークイガレオンがゴークイジャーの上に来るとロープが降り、ゴークイジャーはロープを掴み、中に入っていた。

「なあ、白雪達はどうすんだ？」

「降りしてる暇もねえ! このままやるぞ!!」

ゴークイブルーが下を見るとさやか達が走ってきて、ロープを掴んだ。

「コラー！ あたし達忘れてたろ！！」

「「「あつ・・・・・・」」」

「嘘でも良いから否定しろよ！！」

さやかが叫ぶとゴーカイジャーは声を漏らし、杏子は怒ったが、全員ゴーカイガレオン何に入った。

「俺達、降りた方が良いか？」

「そんな暇ねえ！！」

ゴーカイレッドが操縦桿のある部屋に行くと雄二が聞くと、ゴーカイレッドは雄二を部屋から出しながら言い、操縦桿を握った。

「行くぞ！！」

ゴーカイガレオンからゴーカイジェット、ゴーカイトレーラー、ゴーカイレーサー、ゴーカイマリンが出ると同時に、雄二やさやか達は移住区に付いた。

「『『海賊合体!!』』」

ゴーカイジャーの掛け声と共にゴーカイマシーンは合体して、ゴーカイオーとなった。

「『『完成! ゴーカイオー!!』』」

ゴーカイオーはゴーカイケンを構え、サラマンダムと距離を取っていた。

「貴様等などに負けるか!!」

サラマンダムは地面にプラグを刺した。

「またあれか!!」

「どうすんのよ!？」

ゴーカイブルーは操縦桿を強く握った。

「僕に任せて!!」

「わかった。お前に任せる」

地面がひび割れて来るとゴーカイブルーは操縦桿を回すと、ゴーカイオーは走り出した。

「いつけええええええええええええええええええ!!」

「「嘘だろおおおおおおおおおおおおお!!?」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゴーカイブルーの行動に予想していなかった為、ゴーカイレッド、ゴーカイイエロー、ゴーカイグリーンは叫び、ゴーカイピンクも啞然としていた。

「うおおおおおおおおおおおおお！！！」

地面が爆発する直前にゴーカイオーは飛び、そのままゴーカイケンでサラマンドムを斬りつけた。

「ぐお！？」

サラマンドムが倒れると、ゴーカイオーは着地した。

「お前、勇気あるな………」

「みんながいるから、僕は勇気を出せるんだ」

ゴーカイバツクルからマジレンジャーのレンジャーキーが光を放ちながら出てきた。

「何だ？ これ」

「知らねえが、やってみるぞー！！」

ゴーカイジャーはマジレンジャーのレンジャーキーを構えた。

「レンジャーキー、セット!!」

レンジャーキーを鍵穴に入れて回すと、ゴーカイオーの背中のダイアルが回り、ゴーカイオーの右腕、左腕から翼が出て、右足、左足からは爪が出て、胸からはドラゴンの頭が飛び出した。

「完成! マジゴーカイオー!!」

サラマンドラはマジゴーカイオーを見て驚いていた。

「一体何だそれは!?!」
「さあな、知るか」

マジゴーカイオーは空に飛ぶと、ドラゴンの口から火を吐きだし、

サラマンドラムにダメージを与えた。

「マジドラゴンー!!」

ゴークイブルーが叫ぶとマジゴークイオーから、ドラゴン、マジドラゴンが出てきて、サラマンドラムを翼で攻撃した。

「ぐわあああああああああああああ!?!」

マジドラゴンがゴークイオーに戻ると、ゴークイオーは地面に着地した。

「一気にとどめだ!!」

ゴークイジャーはレンジャーキーを掴んだ。

「let's go!!」

ゴーカイオーが再びマジゴーカイオーになると、マジドラゴンが飛び出した。

「ゴーカイ、マジバインド!!」

マジドラゴンはサラマンドラの周りを回り、魔法陣を作り潰す、ゴーカイマジバインドを発動し、サラマンドラを潰していく。

「ぐっ、ぐわああああああああああああ!!」

サラマンドラが爆発するとマジドラゴンはゴーカイオーに戻り、マジゴーカイオーになった。

「すげえな、これ」

「もしかしたら、他にはあるのかもね」

「そうだと思うけど」

「一体いくつあるんだろうな」
「34、だと思う」

ゴークイガレオンに戻ると、全員帰路についた。

第6話 勇・気・爆・発（後書き）

次回をお楽しみに。

なるべく感想が欲しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0676z/>

海賊戦隊ゴーカイジャー ～伝説を継ぐ者達～

2012年1月4日13時51分発行